

# 菖蒲江1遺跡

## 第2次発掘調査報告書

2002

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

菖蒲江 1 遺跡

第2次発掘調査報告書

平成14年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



## 序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査した、菖蒲江1遺跡の調査結果をまとめたものです。

菖蒲江1遺跡は、天童市の南端、高瀬地区にあります。ここは立谷川扇状地の前縁帯に位置し、水田の中に野菜のためのビニールハウスや果樹園が散在する農業地帯です。

この度、主要地方道天童寒河江線道路改良事業に伴い、工事に先立って菖蒲江1遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、古墳時代前期の竪穴住居跡、畝状遺構、土坑などが検出され、当時の生活を物語る貴重な資料を得ることができました。

近年、高速道路やバイパス、農業基盤整備事業など国・県等の事業が増加していますが、これに伴い、事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加する傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、先人の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成14年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター  
理事長 木 村 宰

## 例　　言

1 本書は緊急地方道整備事業主要地方道天童寒河江線道路改良工事に係る「菖蒲江1遺跡」の第2次発掘調査報告書である。

2 調査は山形県土木部の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3 調査要項は下記のとおりである。

遺跡名　菖蒲江1遺跡（平成10年度登録）

所在地　山形県天童市大字高巣字高田、菖蒲江

調査主体　財団法人山形県埋蔵文化財センター

調査期間　発掘調査 平成13年4月1日～平成14年3月31日

現地調査 平成13年7月9日～平成13年11月9日

調査担当者　調査第二課長 尾形　與典（調査主任）

主任調査研究員 伊藤　邦弘

調査員 長瀬　えみ子

調査指導 山形県教育庁社会教育課文化財保護室

4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県村山総合支庁建設部道路課、天童市教育委員会、村山教育事務所等関係機関にご協力いただいた。

5 本書の作成・執筆は尾形與典、長瀬えみ子が担当した。編集は須賀井新人、佐竹弘嗣が担当した。

6 委託業務は下記のとおりである。

遺構の写真測量・実測 (株)シン技術コンサル

基準点測量 (株)菅野測量設計事務所

7 出土遺物、調査記録類については、報告書刊行後、山形県教育委員会に移管する。

## 凡　　例

- 1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。  
S T... 竪穴住居跡 S D... 蝦状遺構 S K... 土坑 S X... 性格不明遺構 E K... 遺構内土坑  
E P... 遺構内ピット R P... 完形・一括土器 R Q... 石製品 P... 土器 S... 磁  
W... 炭化材
- 2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。
- 3 遺構図に示す座標値は、平面直角座標系第X系により、高さは東京湾平均海面を基準とする海拔高で表す。
- 4 報告書執筆の基準は下記のとおりである。
  - (1) 調査概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は座北を示している。
  - (2) 遺構実測図は1/15、1/30、1/60、1/400で採録し、各挿図毎にスケールを付した。
  - (3) 遺構実測図、土層断面図中のスクリーントンの用法は各図に示した。
  - (4) 遺物実測図・拓影図は1/2、1/3、1/6で採録し、おのおのスケールを付した。  
遺物図版については、任意の縮尺とした。
  - (5) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。
  - (6) 遺物観察表中の( )内数値は、残存値を示している。
  - (7) 遺構覆土の色調の記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に掲った。

# 目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の方法と経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
III 遺構と遺物	
1 調査区と層序	4
2 遺構と遺物の分布	4
3 堅穴住居跡	7
4 土坑	27
5 畝状遺構	28
6 その他の遺構	28
7 遺構外の遺物	33
IV 調査のまとめ	40
報告書抄録	46

## 表

表 1 堅穴住居跡観察表	35
表 2 土師器観察表( 1 )	36
表 3 土師器観察表( 2 )	37
表 4 土師器観察表( 3 )	38
表 5 土師器観察表( 4 )	39
表 6 弥生土器観察表	39
表 7 石製品観察表	39
表 8 類型別土師器出土一覧	45

## 挿 図

第1図	調査区概要図	1	第25図	S T 15豎穴住居跡及び同出土遺物	22
第2図	遺跡位置図	2	第26図	S T 17豎穴住居跡	23
第3図	地形区分図	3	第27図	S T 17・19豎穴住居跡出土遺物	23
第4図	基本層序	4			24
第5図	遺構配置図	5	第28図	S T 19豎穴住居跡	25
第6図	S T 3 豊穴住居跡	7	第29図	S K71・72土坑及び同出土遺物	26
第7図	S T 3 豊穴住居跡出土遺物	8			26
第8図	S T 4 豊穴住居跡	9	第30図	畝状遺構及び同出土遺物	27
第9図	S T 4 豊穴住居跡出土遺物	9	第31図	S X 10性格不明遺構及び 同出土遺物	28
第10図	S T 5 豊穴住居跡	10	第32図	S X 18土器捨て場及び同出土遺物	29
第11図	S T 5 豊穴住居跡出土遺物(1)	11			30
第12図	S T 5 豊穴住居跡出土遺物(2)	12	第33図	S X 18土器捨て場出土遺物	30
第13図	S T 6 豊穴住居跡	13	第34図	S X 18土器捨て場・包含層 出土遺物	31
第14図	S T 7 豊穴住居跡	13	第35図	包含層出土遺物	32
第15図	S T 7 豊穴住居跡出土遺物	14	第36図	間層出土遺物	34
第16図	S T 8 豊穴住居跡	14	第37図	豎穴住居跡の主軸方向と規模	40
第17図	S T 8 豊穴住居跡出土遺物	15	第38図	豎穴住居跡散布図	40
第18図	S T 9 豊穴住居跡	16	第39図	土師器分類図(1)	41
第19図	S T 9・11豎穴住居跡出土遺物	16	第40図	土師器分類図(2)	42
第20図	S T 11・12豎穴住居跡	17	第41図	土師器分類図(3)	43
第21図	S T 13豎穴住居跡	18	第42図	土師器分類図(4)	44
第22図	S T 13豎穴住居跡出土遺物	19			
第23図	S T 14豎穴住居跡	20			
第24図	S T 14豎穴住居跡出土遺物	21			

## 図 版

図版 1	遺跡遠景・調査風景
図版 2	調査風景
図版 3	S T 3・4 豊穴住居跡
図版 4	S T 3・4・5 豊穴住居跡
図版 5	S T 5 豊穴住居跡
図版 6	S T 5 豊穴住居跡
図版 7	S T 6・7・8・13・14・15豎穴 住居跡 S K72土坑
図版 8	S T 17・19豎穴住居跡
図版 9	S X 18土器捨て場 B区検出状況

図版10	畝状遺構 A・B区完掘状況
図版11	調査区空中写真
図版12	出土遺物(1)
図版13	出土遺物(2)
図版14	出土遺物(3)
図版15	出土遺物(4)
図版16	出土遺物(5)
図版17	出土遺物(6)
図版18	出土遺物(7)



## I 調査の経緯

### 1 調査に至る経緯

菖蒲江1遺跡は、山形県教育委員会により平成10年度に登録された遺跡で、東西約130m、南北約100mの規模が考えられている。

この度、緊急地方道整備事業に係って主要地方道天童寒河江線の道路改良工事が計画され、これを承けて平成11年9月、山形県教育委員会により工事予定地内に所在する本遺跡の範囲や性格を調べるために試掘調査が行われた。その結果、フレイク、土師器、須恵器、中世陶器、磁器、漆器といった複数の時期にまたがる遺物が得られ、縄文時代、古墳時代、平安時代、中世と時期が複合する集落跡と考えられた。このような調査結果をもとに関係機関による協議が行われた結果、緊急発掘調査により記録保存を図ることになり、記録保存部分については財団法人山形県埋蔵文化財センターが県から委託を受けて、発掘調査を実施することになった。

### 2 調査の方法と経過

発掘調査は、主要地方道天童寒河江線に隣接して建設が予定されている山形県総合交通安全センター（仮称）整備事業（山形県警察本部）に係る調査を先行して行うこととなったため、これを第1次調査、本事業に係る調査を第2次調査とした。調査は7月9日から11月9日までの延べ124日間のうち、お盆のための現場閉鎖や土・日の休業日を除き、実質82日間行った。

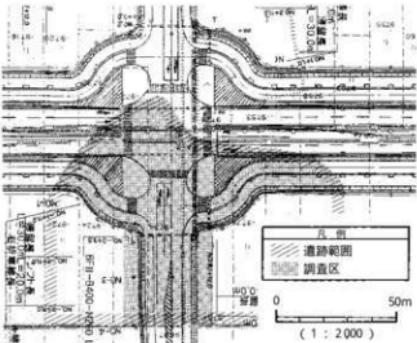
調査面積は、主要地方道天童寒河江線道路改良工事に係る車道部分の3,000m<sup>2</sup>を対象としたが、後に設計変更により増加し、3,480m<sup>2</sup>となった。

5月8日に発掘器材の搬入と調査事務所の設営を行い、その後、本事業及び県警本部事業に係る関係者により発掘調査中の安全を祈願する鍔入式を行う。翌9日に調査区を設定、県教育委員会の試掘資料をもとに、遺物の出土状況や遺構検出面の深さ等を確認するために試掘を行い、その結果をもとに重機を用いて表土の除去作業を行った。調査予定地内に現道があるため、当初現道を避けて調査を行い、遺構の検出状況によって後の対応を協議することとした。

調査の進捗に伴い、現道の両側は昭和30年代の現道建設に伴って土取りのために搅乱を受けていることが判り、また泥炭の露頭地域とも重なるため、調査区から除外した。

調査区が現道や耕作中の畠への搬入路などによって4分割されているため、東からA区～C区、北をD区と呼称し、調査を進めた。

10月17日にラジコンヘリによる遺構写真測量を実施し、10月19日には調査説明会を行い地元・高橋小学校の児童をはじめ約200人の参加を得た。11月9日には調査事務所の撤収を行い、現地調査を終了した。



第1図 調査区概要図

## II 遺跡の立地と環境

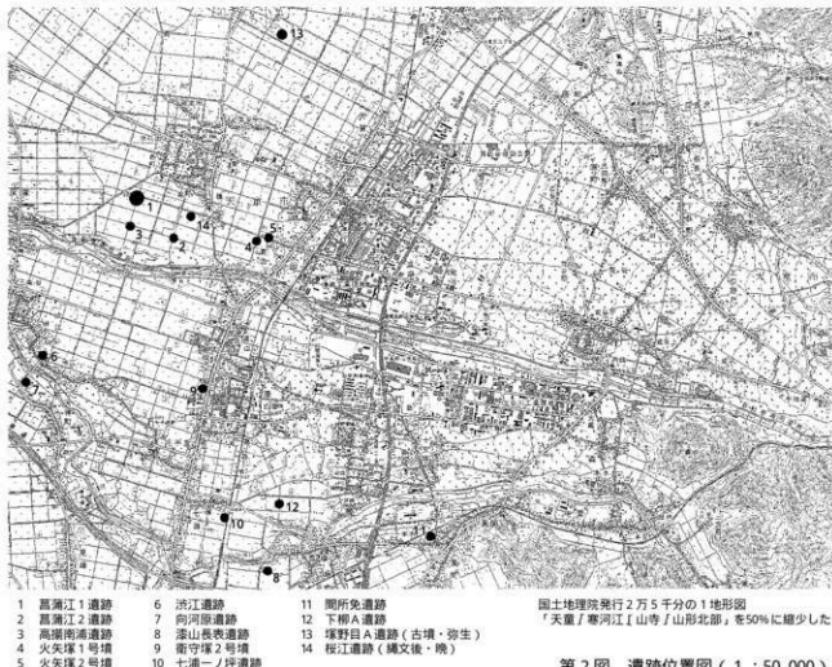
### 1 地理的環境

菖蒲江1遺跡は天童市大字高揖字高田、菖蒲江に跨って所在する。当地域は、奥羽山脈の面白山(1,264m)付近に源を発して西流し、最上川の支流である須川に注ぐ、長さ20km、流域面積76平方kmの立谷川と、立谷川の南を西流して馬見ヶ崎川に注ぐ村山高瀬川の二河川により形成された半径約8kmの複合扇状地である「立谷川扇状地」の前縁帯に位置し、菖蒲江1遺跡付近の標高は約98mを測る。

立谷川扇状地は、扇頂部の山寺付近で標高約220m、扇端部の旧羽州街道(旧国道13号線)沿いで約110mとなっており、その勾配は平均で約15/1,000と急勾配のため、浸食による土砂運搬量が大きく、古来から氾濫を繰り返してきた。立谷川の氾濫は江戸時代だけで6回も記録されており、最近では昭和25年の豪雨による水害があった。調査でも、泥炭が土壤化した遺構検出面のさらに下層に、洪水による河川堆積物と思われる灰色細砂が観察された。

### 2 歴史的環境

立谷川扇状地の扇端部には自然湧水が多く分布しており、長岡地区の「長清水」、芳賀地区



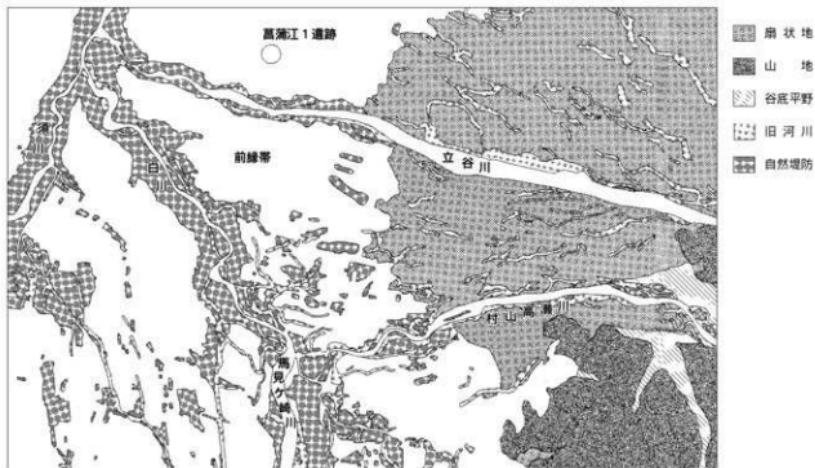
第2図 遺跡位置図(1:50,000)

の「古井戸」。そして清池の八幡神社境内には「礼井戸」などがあり、中でも清池八幡神社の泉は水量が豊富な井戸で、灌漑用水に使われてきた。

扇状地では河川が伏流するため、自然湧水地が多い扇端部付近に、遺跡が集中して立地することが多いが、縄文後～晩期頃からは、扇端部からその先の前縁帯が集落の占地として捉えられるようになり、特に弥生時代から古墳時代にあっては、水位が高く灌漑の必要のない前縁帯が水稻農耕の適地として認識されるようになってきたものと思われる。

古墳時代に属する遺跡を地図上にプロットしてみると、立谷川扇状地の扇端部から前縁帯にかけて遺跡が多く分布していることがわかる。扇端部付近には火矢塚1・2号墳や衛守塚2号墳などの古墳があり、前縁帯には、塚野目集落、高巒集落、漆山集落、そして七浦集落の周辺に遺跡の分布が見られる。

時期は異なるが、塚野目集落周辺には矢口遺跡、塚野目A遺跡がある。塚野目A遺跡からは弥生後期の「天王山式」と呼ばれる、頸部に刺突文を持つ壺などが出土している。高巒集落周辺には、縄文後～晩期に属する砂子田遺跡や高巒南浦遺跡、礼井戸遺跡等がある。時期は下るが、菖蒲江1遺跡のすぐ北東の高巒集落は、旧高巒城の城下町である。羽州探題として山形に入部した斯波兼頼の孫、義直が分封されて高巒に城を構えたとのいわれがあり、その地は現在の長岡周辺と考えられている。後、義直は蔵増に移り、蔵増殿と称したという。また高巒願行寺文書には1475（文明7）年に斯波の一族である天童頼基が「城池を創め」たとの記述が見え、義直が蔵増に移って廃城となっていた高巒城を、現在の高巒の地に移し、湧水地帯であるこの付近の地理的環境を利用して堀を巡らし、城を構えたものと考えられている。



「土地条件図 山形」『土地条件調査報告書（山形地区）』  
(昭和60年3月、建設省国土地理院)から抜粋

第3図 地形区分図 (1 : 60,000)

### III 遺構と遺物

#### 1 調査区と層序

菖蒲江1遺跡の調査区は、東西・南北と交差する現道を取り込むように設定された。事前の協議により、これら現道の通行を妨げないように調査を進め、遺構の分布状況によって現道の切り廻し等の措置を考える事となった。また調査区の南に耕作中の畠地があり、畠地への進入路も同じ取り扱いをすることとした。このために調査区が4分割されることとなり、南北道路の東側をA区、西側をB区、進入路の西側をC区、東西道路の北側をD区と呼称し、調査を進めることとした。

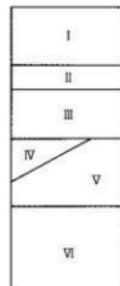
遺跡の基本層序は次の通りである。I層は水田の耕作土で、灰黄褐色シルトに褐色シルト（酸化土）が斑状に混じる。微量ではあるが、炭粒を含む。II層は耕作土の基盤であり、灰黄褐色シルトにI層とIII層がブロック状に入る。全体に酸化が目立ち、I層より黄色く見える。III層は遺物包含層で、褐灰色粘質シルトに酸化土の褐色シルト酸化土が筋状に混じる。炭粒を微量含み、層中に遺物を包含する。この層中に遺構の掘込面が想定されるが、設計変更による調査区拡張の際に、

S T 17竪穴住居跡に係ってIII層を注意深く掘り下げたが、III層中では遺構のプランを確認することはできなかった。IV層は黒褐色を呈するシルトである。いわゆる泥炭であるが、分布は全面的ではなく、III層の直下が次に述べるV層（地山）となるところもある。泥炭の分布していないところが集落として使用されていたようである。V層は黄灰色砂質シルトに酸化土の褐色シルトが筋状に混じるもので、調査に際しては、この層を地山と称した。VI層は灰色細砂であり、遺構検出面のさらに下層に位置する。洪水時の河川堆積物と思われるが、広がりは確認していない。

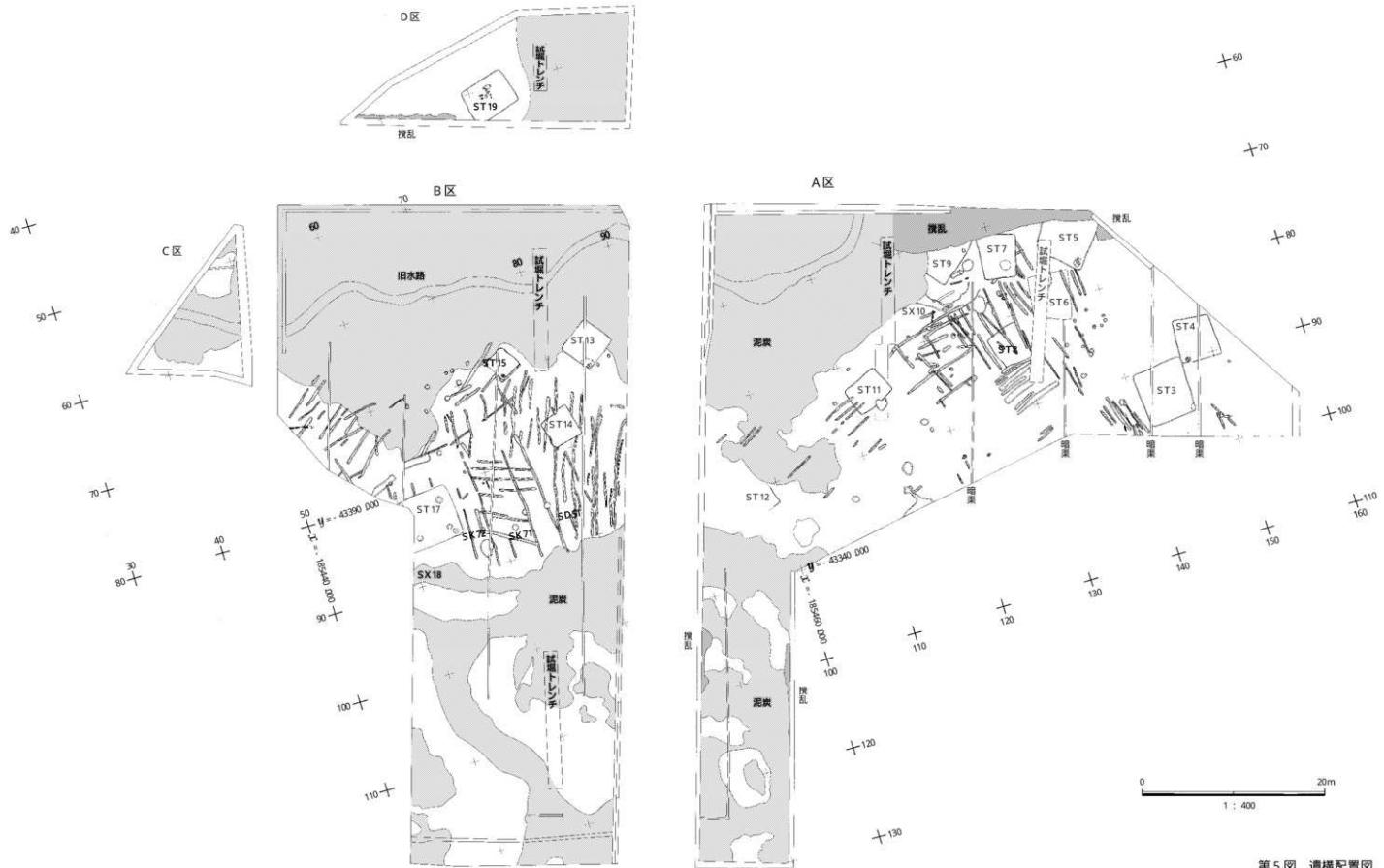
#### 2 遺構と遺物の分布

竪穴住居跡14棟、土坑、畝状遺構などを検出した。竪穴住居跡は一般的に浅く、南東あるいは南西の隅に貯蔵穴を持つものもある。畝状遺構はほとんど竪穴住居跡の廃絶後に行われたものと考えられ、方向にいくつかの違いが見られる。方向の差が時期差を表すものと思われる。遺構の多くは東西に延びる微高地上に立地している。調査区の北部や南部は僅かに低くなっていて、当時もところどころ泥炭が露頭した湿地帯となっていたと考えられる。S X 18土器捨て場などは、泥炭が露頭して湿地帯となっていたところが土器等の捨て場として利用されたものと考えられる。

表土除去に際してI～III層までを掘り下げたが、遺物包含層中に多くの遺物が出土した。その多くはまとめて出土しており、あるいは遺構に属するものであった可能性も考えられるが帰属が不明なため、包含層の遺物として取り扱った。以下に種別毎に遺構と遺物を概述する。



第4図 基本層序



第5図 遺構配置図

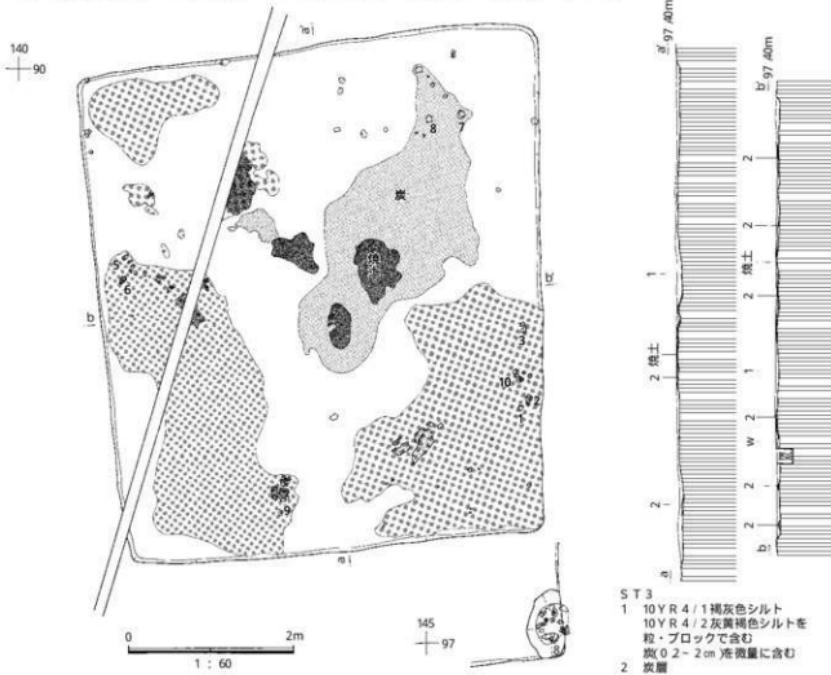


### 3 竪穴住居跡

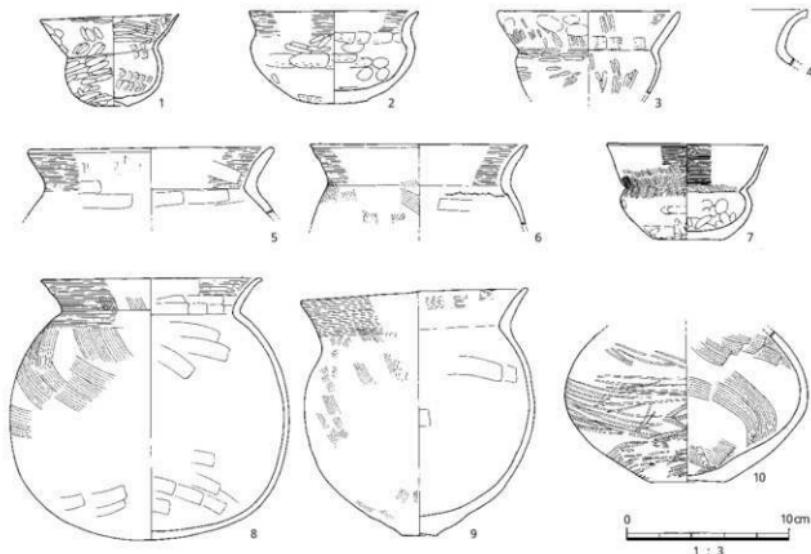
調査で14棟の竪穴住居跡を検出した。配置図で判るように重複する竪穴住居跡はなく、ここでの居住期間がそれほど長いものではないであろうことを示唆している。竪穴住居跡の主軸方向については、長軸・短軸が不明なものもあるため、南北軸を主軸とした。公共座標の北、即ち座北は、当該地域では真北より西に $0^{\circ} 18' 24''$  偏しているが、ここでは座北を以て北とした。南北軸は座北を基準に、東西辺が残っている場合は両辺の方向の平均値を、片辺のみの遺存の場合は遺存辺の方向を主軸方向とした。また規模については、両辺が判るものについてはその平均値を、片辺が不明の場合は遺存辺長を軸長とした。住居跡の面積は、各軸長を乗じて算出した。面積をこの方法で算出すると誤差を多分に含むことになるが、概観するのが目的であるのでこの方法を採り、さらに数値を丸めるために坪数に換算した。

#### S T 3 竪穴住居跡（第6図）

A区東端、140-90区に所在する。平面形は南北に長い長方形を呈し、東西辺が北側でやや開き、北東隅部がつまみ出されたように張り出す。規模は南北軸が6.1m、東西軸は5.4mを測る。規模が判明した住居跡の中で最も大型の住居であり、約10坪ある。



第6図 S T 3 竪穴住居跡



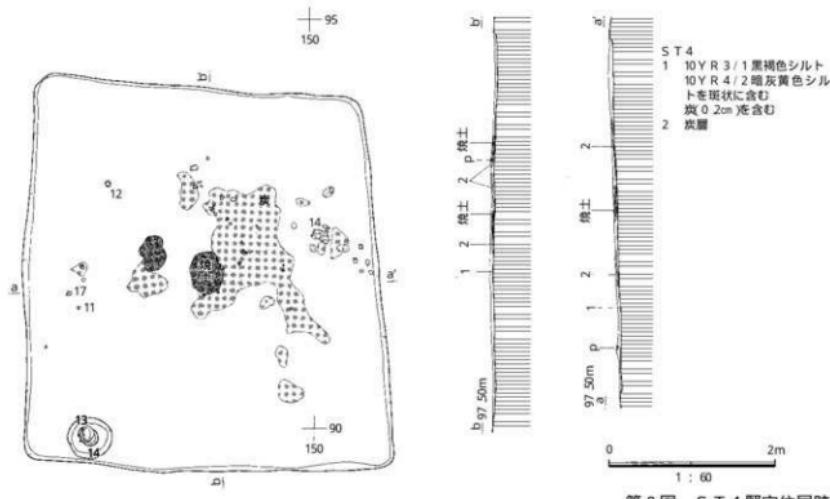
第7図 S T 3 竪穴住居跡出土遺物

主軸方向はN-3°30'-Wを測り、覆土は1層である。床面のほぼ全域に、炭や燃え残りの建築部材と思われる炭化材が遺存しており、焼失家屋と考えられる。検出面からの深さは最大で約3cmを測る。周溝、柱穴は共に見られず、南東隅に165×100cmの南北に長い楕円形の貯蔵穴を持つ。貯蔵穴の東壁は住居の東壁の外まで潜り込んでおり、オーバーハングした形となっている。使用中に何らかの必要性があって作り替えたものであろうか。貯蔵穴の中から鉢（第7図1）と小型甕（第7図8）が破片の状態で出土している。貯蔵穴の深さは床面から約12cmを測る。竪穴住居跡ほぼ中央に地床炉と思われる被熱痕跡が見られる。遺物は土師器鉢・壺・甕などが出土している。（第7図）

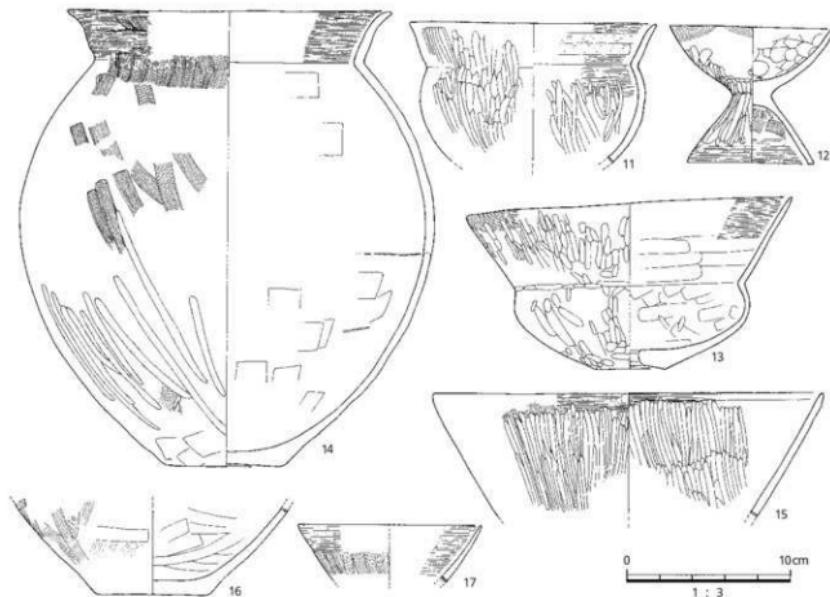
#### S T 4 竪穴住居跡（第8図）

A区最東端、140-150-80-90区に所在する。平面形は、南北に長い不整方形を呈し、北西隅と南東隅とがつまみ出されたように張り出す。南北軸が4.7m、東西軸は4.3mを測る。主軸方向はN-3°48'-Wを測り、覆土は1層である。床面ほぼ中央に炭の分布が認められる。壁は緩く立ち上がり、検出面からの深さは約5cmを測る。周溝、柱穴は見られない。

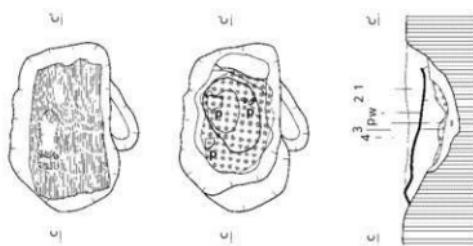
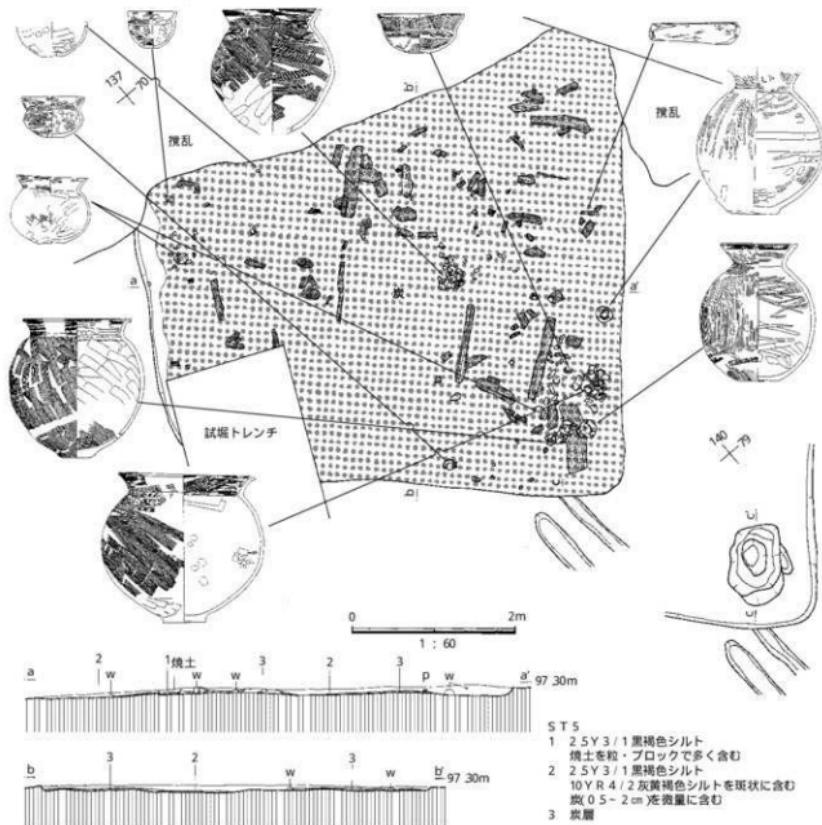
南西隅近く、南壁に接するように50×55cmのほぼ円形を呈する貯蔵穴を持つ。床面から貯蔵穴の底部までの深さは約13cmを測る。遺物は土師器壺・甕・鉢・高杯などが出土している。第9図13の鉢は、甕の破片（第9図14下半部）と共に貯蔵穴から出土したもので、焼成後に底部穿孔されていること、外面に被熱痕跡が見られることなどから、煮炊きに際して甕等の支脚と



第8図 S T 4 竪穴住跡



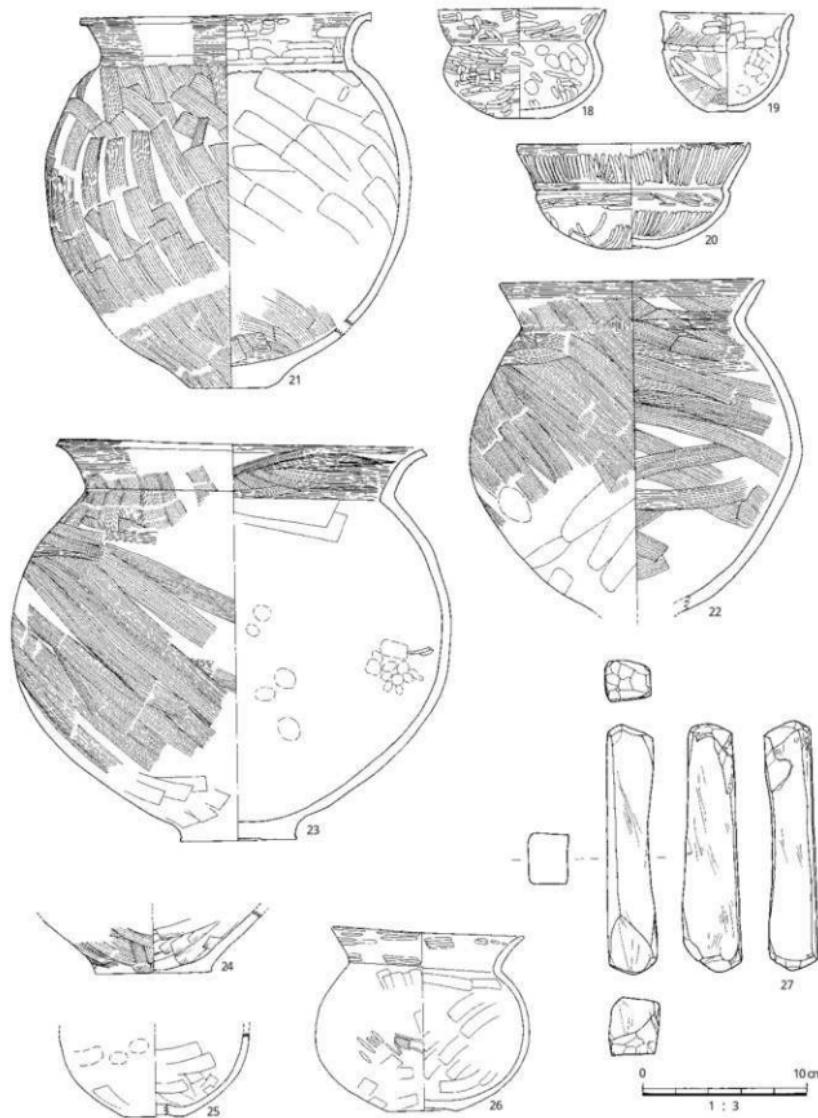
第9図 S T 4 竪穴住跡出土遺物



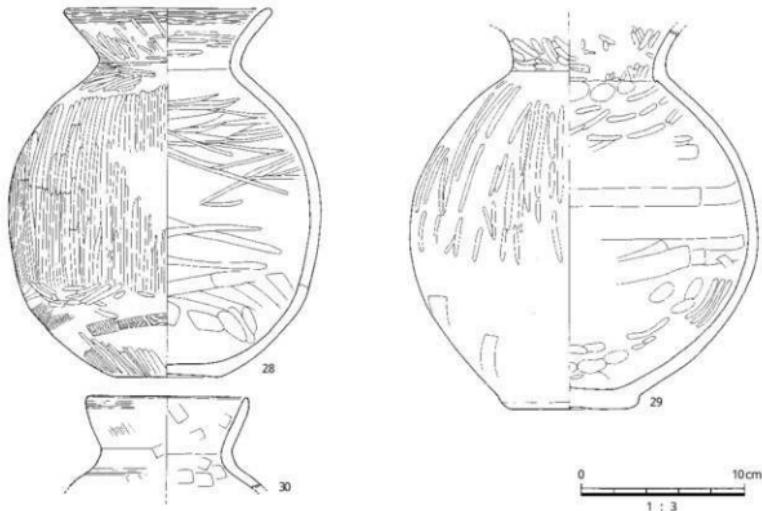
E K 1  
 1 10Y R 3 / 1 黒褐色シルト  
 (粒 0.3~0.3cm) を含む  
 2 10Y R 4 / 1 褐灰色シルト  
 3 泥層  
 4 10Y R 4 / 1 褐灰色微砂  
 2 5G Y オリーブ灰粘土をブロックで含む



第10図 S T 5 穴住居跡



第11図 S T 5 穴住居跡出土遺物(1)



第12図 S T 5 穫穴住居跡出土遺物(2)

して用いられていた可能性も考えられる。

#### S T 5 穫穴住居跡(第10図)

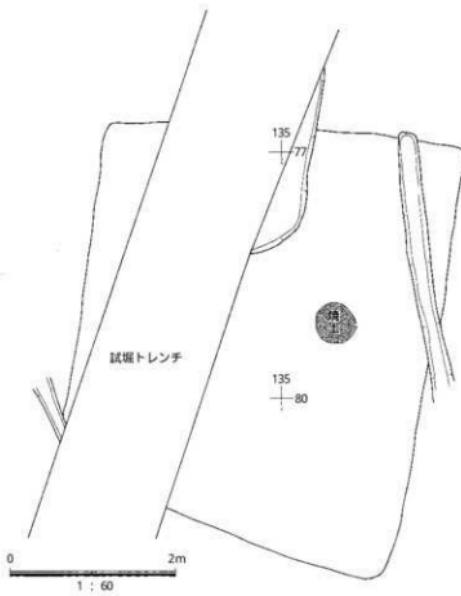
A区北東隅、130-70-80区に所在する。平面形は方形を呈する。西辺が東辺に対して北で開いているので、他の例から北西隅部が張り出すような形を呈すると思われる。住居跡北辺部を、現道造成の際の土取りによって攪乱を受けているため、南北の軸長は不明である。ただ、全住居跡の計測により、短軸を100としたとき、長軸の割合は最高で133、最低107、平均で113という結果を得ている。一方、遺存する東西長は5.45mで、これをもとに計算すると約6mから7mまでの範囲で南北軸長を推定することができる。本住居跡の東辺の遺存長は5.45mであり、この推定から本住居跡は北側1m前後の部分に攪乱を受けたものと考えられる。主軸方向はN-34°30'-Eを測る。覆土は2層である。

床面全体に炭や建築部材が遺存し、焼失家屋と考えられる。壁は緩く立ち上がり、検出面からの深さは約6cmを測る。周溝、柱穴は見られない。

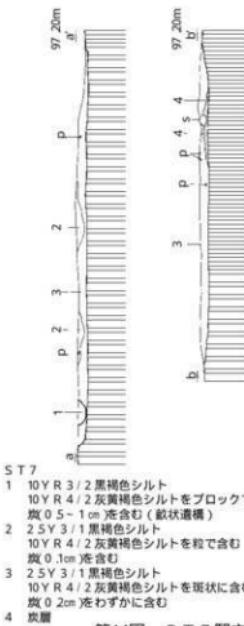
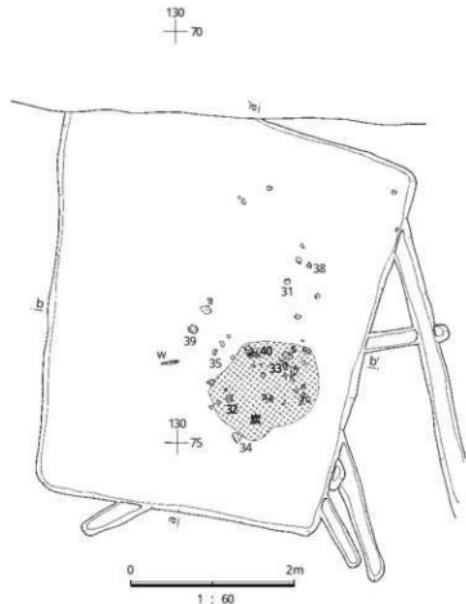
南東隅近くに100×78cmの南北に長い貯蔵穴を持つ。貯蔵穴の検出過程で炭化した板材が認められた。板で蓋をしていたものと思われる。板の樹種は不明である。貯蔵穴の覆土は4層である。第12図29の土師器壺は、上半部が床面に正位で遺存し、下半部は細片となって貯蔵穴内にあった。貯蔵穴内には、このほかに動物のものと考えられる小さな骨片等が残っていた。小片のため同定は不能である。他に有機質遺物が在ったか否かは不明である。遺物は鉢・壺などの土師器の他、砥石も出土している。13点の遺物を図化し得た。調査した竪穴住居跡の中で最も遺物量の豊富なところである。

### S T 6 竪穴住居跡 (第13図)

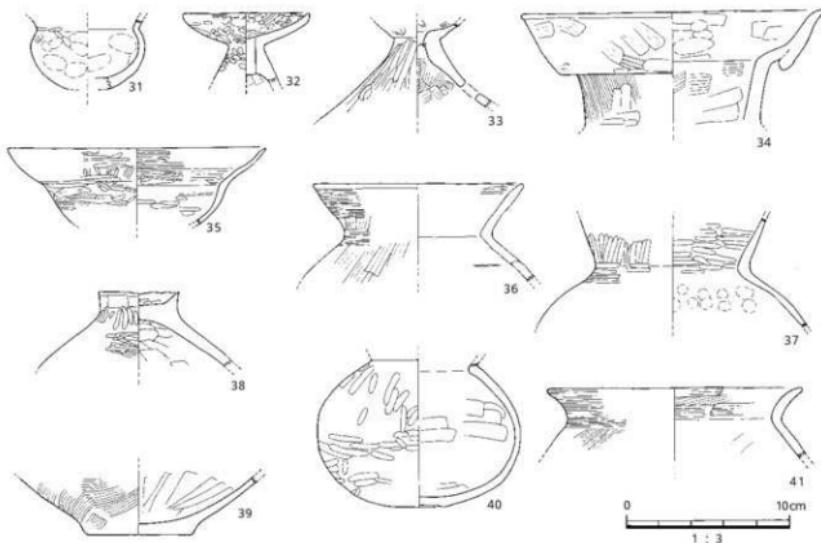
A区東寄り、130-70~80区に所在する。平面形は、西辺を上底、東辺を下底とする台形状を呈する。東辺と西辺の差は1.2mほどあるが、平均して南北軸長が4.9m、東西軸長は4.4mを測る。床面を削平されており、土色変化によって辛うじてプランだけを検出し得た。主軸方向はN-9°-Eを測る。削平のため覆土はないが、住居ほぼ中央に被熱痕跡が認められることから地炉の存在が想定される。残存部の観察から周溝や柱穴、貯蔵穴などはなかったものと考えられる。床面や壁の状況は不明であり、遺物の出土はない。



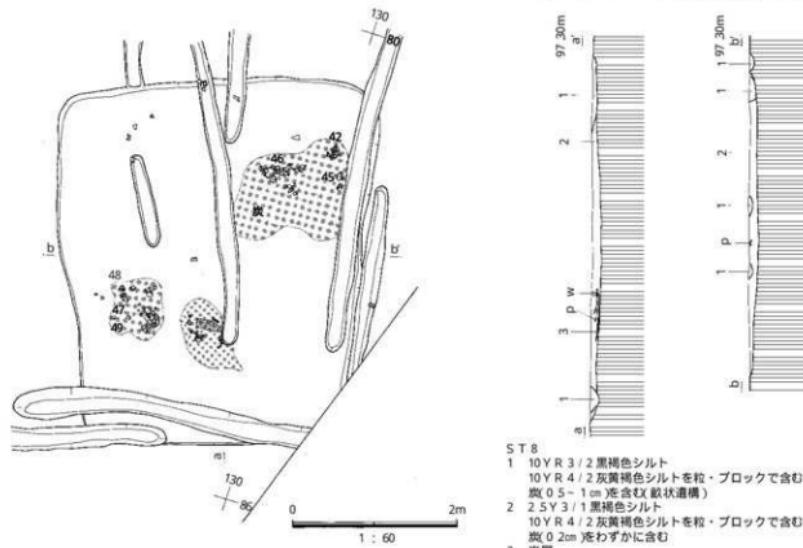
第13図 S T 6 竪穴住居跡



第14図 S T 7 竪穴住居跡



第15図 ST 7 竪穴住居跡出土遺物



第16図 ST 8 竪穴住居跡

### S T 7 竪穴住居跡（第14図）

A区北側、120~130-70区に所在する。平面形は南辺より北辺が長く、かつ北西隅部をつまみ出したような長方形を呈する。北西隅が攪乱を受けて不明であるが、遺存辺から東西軸長が3.5m、南北軸長が4.6mとなる。主軸方向はN-10°30' - Eを測る。覆土は2層である。

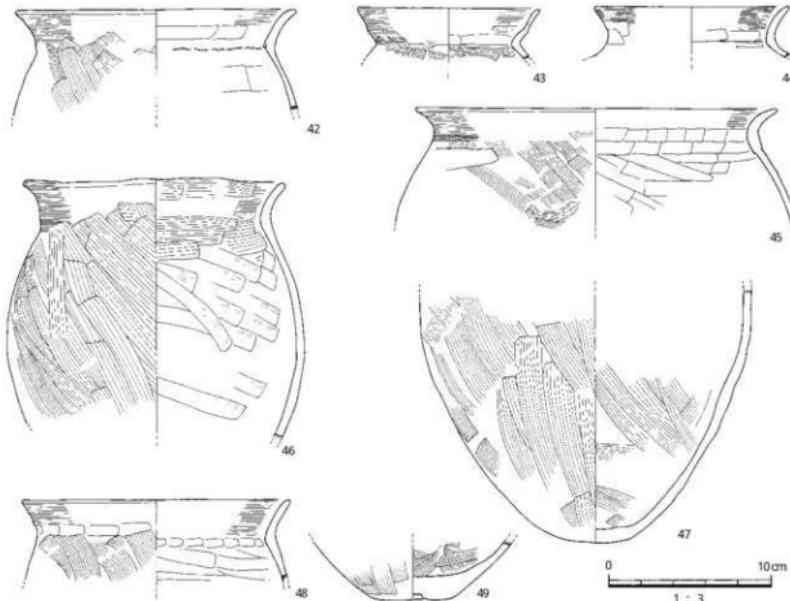
床面中央部東寄りに炭と遺物が散布する。壁は緩く立ち上がり、検出面からの深さは12cmを測る。周溝は見られない。柱穴及び貯蔵穴はない。床面に遺存する炭を除去しても被熱痕跡は認められないので、炉は持たないと考えられる。遺物は、器台・鉢・壺・蓋等が出土している。

### S T 8 竪穴住居跡（第16図）

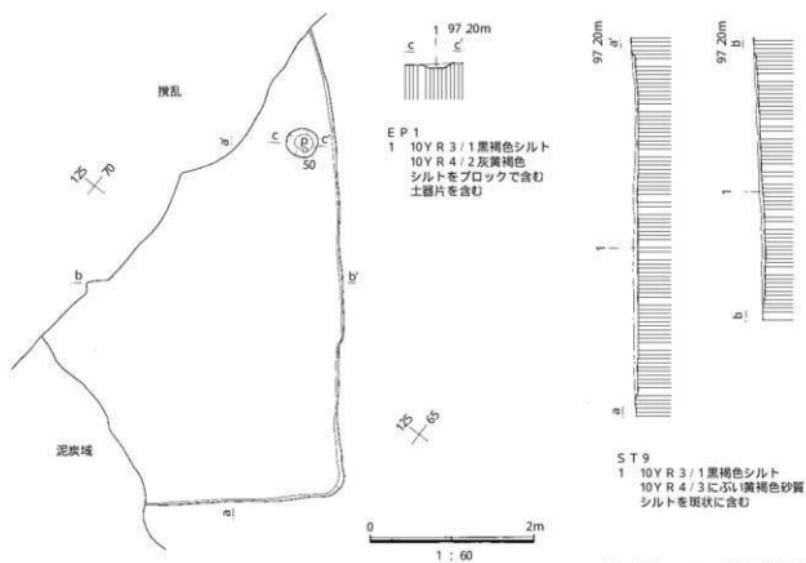
A区東寄り、120~130-80区に所在する。平面形は南辺より北辺が広く、東辺が北東にやや開いた、南北に細長い方形を呈する。南北の軸長は4.5m、東西の軸長は3.6mを測る。主軸方向はN-16° - Wを測る。覆土は1層である。床面中央部から北西、南東に寄ったところに、炭化木材を含む炭と遺物が分布する。壁は緩く立ち上がり、検出面からの深さは最大で11cmを測る。周溝、柱穴、貯蔵穴、炉ともに見られない。遺物は壺・壺等の土師器が出土している。

### S T 9 竪穴住居跡（第18図）

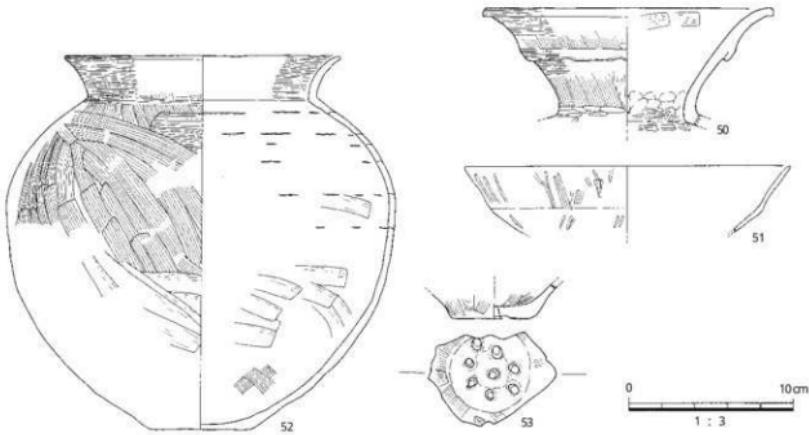
A区北側、120~70区に所在する。平面形は方形を呈すると見られるが、北側及び西側が攪



第17図 S T 8 竪穴住居跡出土遺物



第18図 S T 9 壇穴住居跡

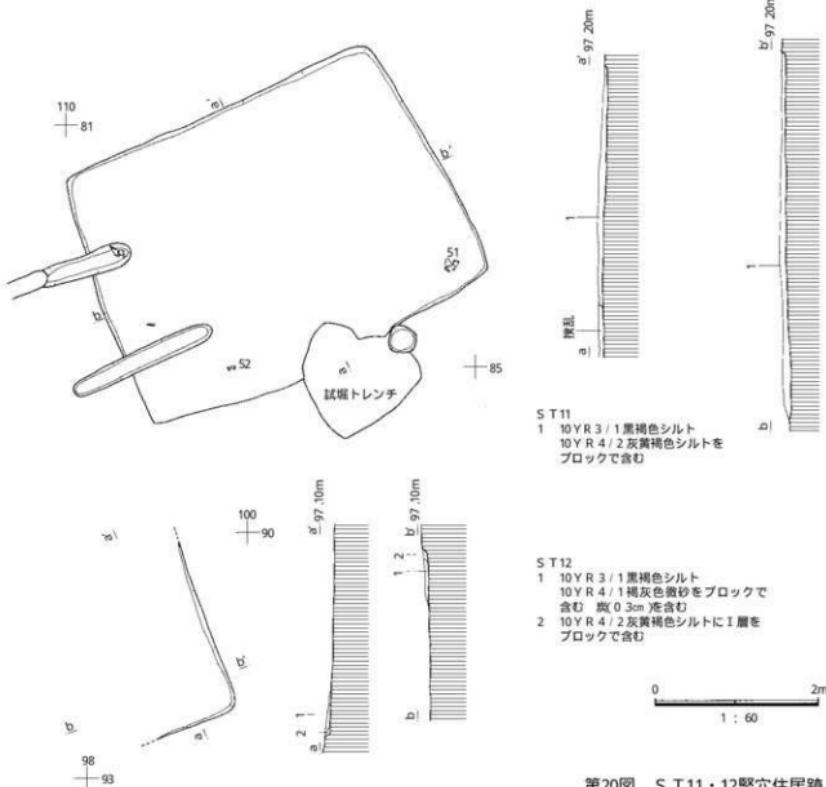


第19図 S T 9・11壇穴住居跡出土遺物

乱を受けており、全体の形は窺えず、規模も不明である。主軸方向はN-39°-Wを測る。覆土は1層である。東壁に近く、直径40cm、深さ6cmほどのピットがあり、底部から土師器片が出土している。ピットの用途は不明である。壁は緩く立ち上がり、検出面からの深さは約3cmを測る。柱穴は見られない。貯蔵穴は南東隅部には見られず、不明である。遺存部分には炉等は見られない。遺物は、壺、鉢の口縁部（第19図50、51）が出土している。

#### S T11豎穴住居跡（第20図）

A区西寄り、110-80区に所在する。平面形は東西に長い長方形を呈する。東西に長軸を有する豎穴住居跡は、規模が判明している11棟中S T11を含めてS T13、S T19と3棟がある。規模は南北軸長が3.3m、東西軸長は4.4mを測る。主軸方向はN-24°30'-Wを測り、覆土は1層である。壁は緩く立ち上がり、検出面からの深さは最大で7cmを測る。周溝、柱穴、貯蔵穴、炉はともに見られない。遺物は甕、多孔の甌（第19図52、53）が出土している。多孔の



第20図 S T11・12豎穴住居跡

瓶は、7~8m離れたB区の面整理中に半分が出土し、後にS T11竪穴住居跡の調査中に出土した半分と接合したものである。

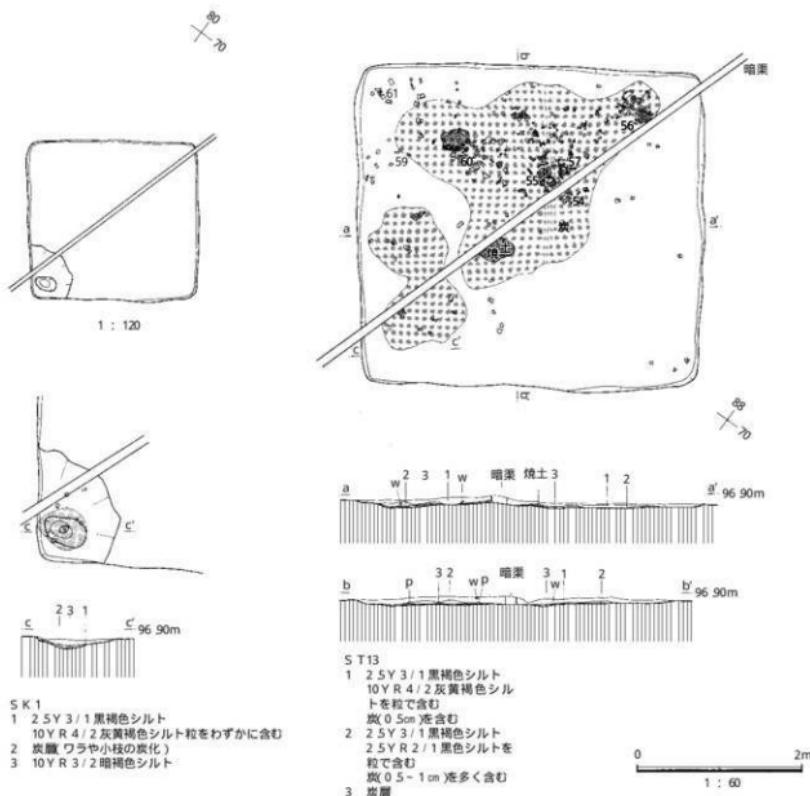
#### S T12竪穴住居跡（第20図）

A区西端、90-90区に所在する。削平のため、東南隅部のみの遺存であり、全体の形や規模は不明である。主軸方向はN-20°-Wを測り、覆土は2層である。

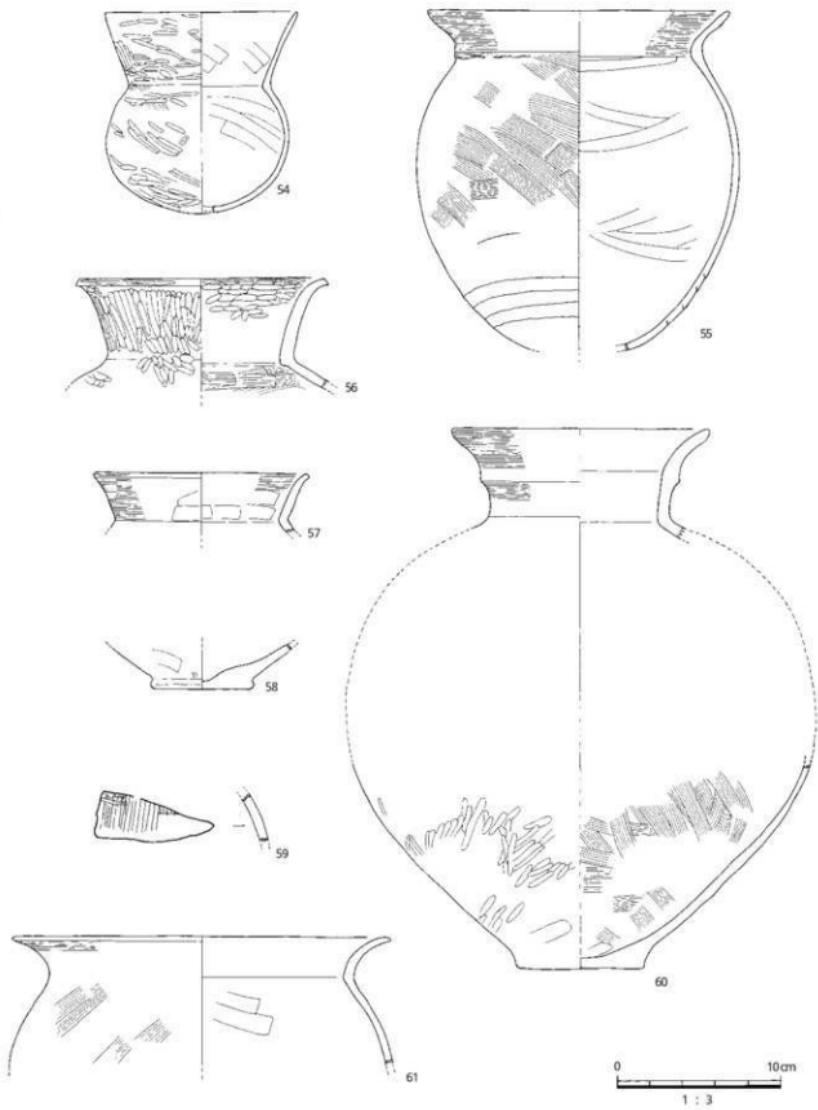
壁は緩く立ち上がり、深さは残存部で検出面から5cmを測る。遺存範囲内に周溝は見られず、削平のため屋内施設の有無は不明である。遺物の出土はない。

#### S T13竪穴住居跡（第21図）

B区北東部、80-60~70区に所在する。東西に長い方形を呈し、南北軸長が3.9m、東西軸長は4.2mを測る。短辺を100とするとき長辺の割合が107ともっと小さく、規模の判明してい



第21図 S T13竪穴住居跡



第22図 S T13竪穴住居跡出土遺物

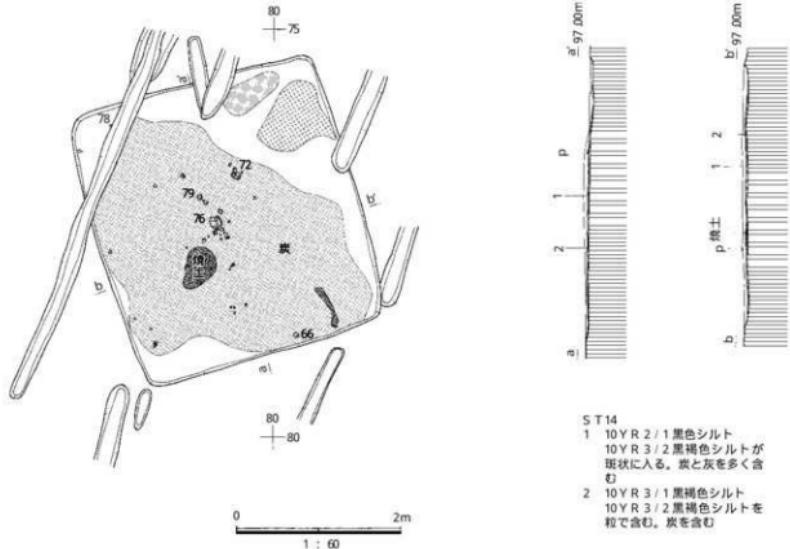
る11棟中、最も正方形に近い平面形を有する。主軸方向はN- 36° 30' - Wを測り、覆土は2層である。床面には中心部から北西隅にかけて炭化物が分布しており、焼失家屋と考えられる。

住居跡内の遺物の分布は、北東隅と南西隅を結んだ対角線から北西側に多く、南東部にはあまり見られない。壁は緩く立ち上がり、検出面からの深さは最大で9cmを測る。周溝、柱穴等は見られない。南西隅に南北55cm、東西40cm、深さ約12cmの、皿状の堀り込みがあり、位置等から貯蔵穴と考えられる。覆土は2層で、下層にはワラや小枝と思われる炭化物を含んだ炭層が見られた。床面ほぼ中央部と北西寄りに被熱痕跡が見られ、2カ所に地床炉を持つものと考えられる。

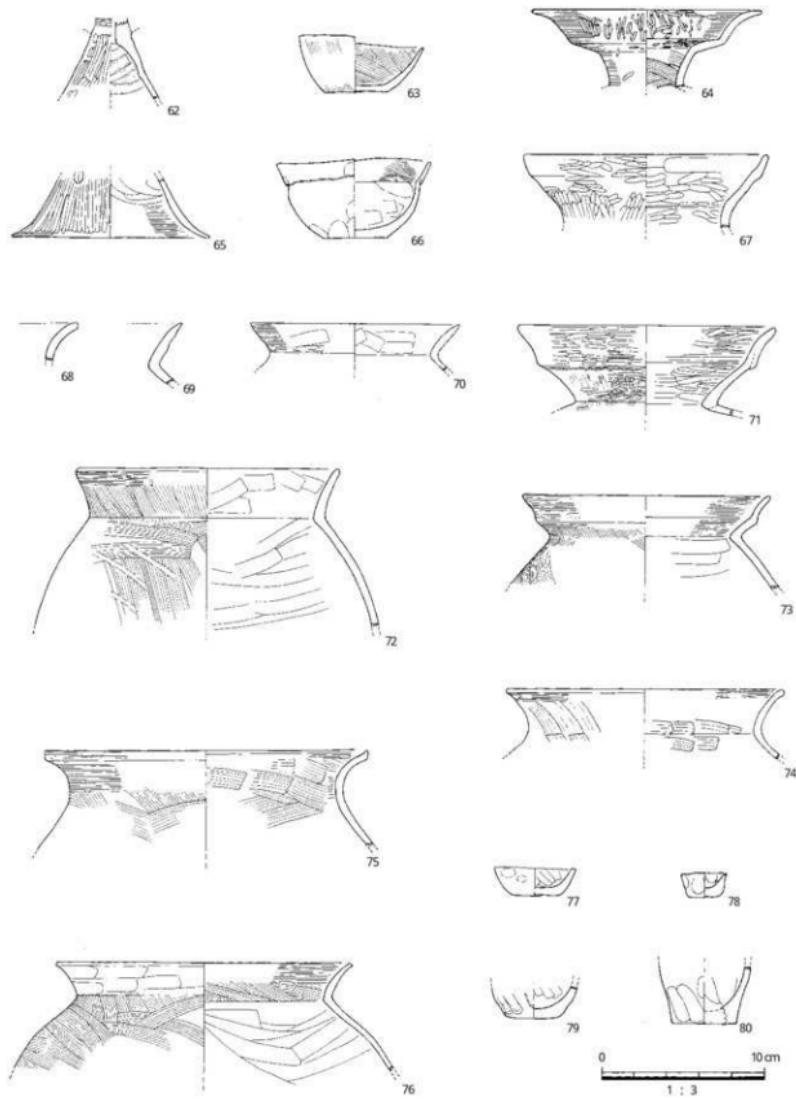
遺物は、壺や甕が出土している。第22図59は壺の体部であるが、外面に刃物等の鋭利な道具で線描が施されており、絵画ではないか、とも思われるが遺存部分が小さいため詳細は不明である。

#### S T 14 竪穴住居跡（第23図）

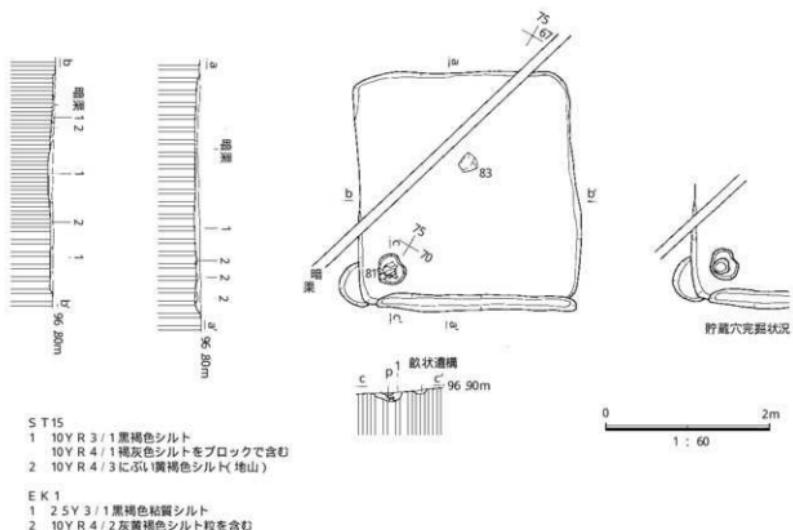
B区東寄り、70~80-70区に所在する。相対する辺の長さがそれぞれほぼ等しい方形を呈する。規模は南北軸長が3.4m、東西軸長は3.1mを測る。主軸方向はN- 17° - Wを測り、覆土は2層である。床面ほぼ全域に炭化した建築部材や炭が分布しており、焼失家屋と考えられる。壁は緩く立ち上がり、検出面からの深さは最大で6cmを測る。周溝は見られない。柱穴、貯蔵穴も、ともに見られない。床面中央部から南西に寄った所に焼土及び被熱痕跡が見られ、地床炉を持つものと考えられる。遺物は器台、鉢、壺、甕、手捏土器などが出土している。特に手



第23図 S T 14 竪穴住居跡



第24図 S T 14竪穴住居跡出土遺物

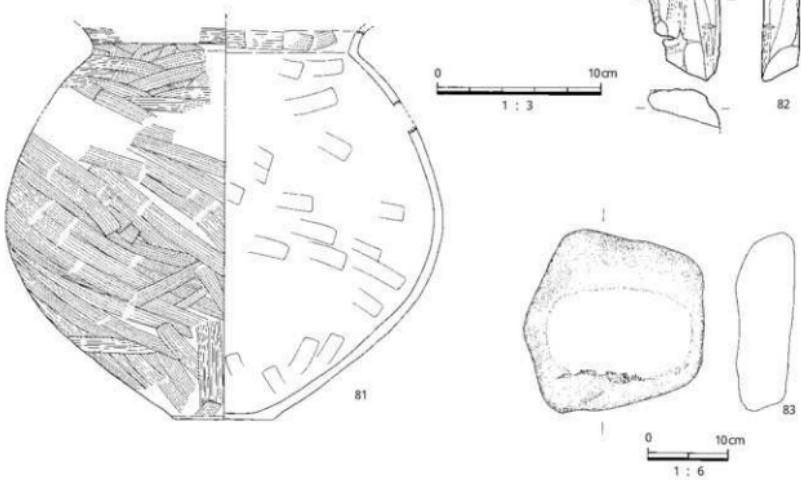


S T 15

- 10Y R 3 / 1 黒褐色シルト  
10Y R 4 / 1 褐灰色シルトをブロックで含む
- 2 10Y R 4 / 3 にぶい黄褐色シルト(地山)

E K 1

- 2 5 Y 3 / 1 黒褐色粘質シルト
- 2 10Y R 4 / 2 灰黄褐色シルト粒を含む



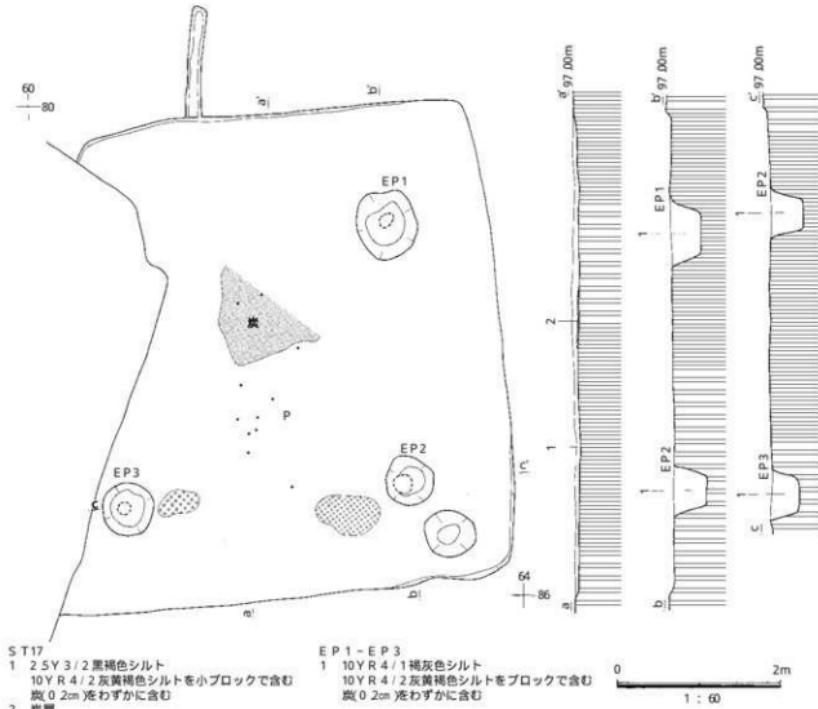
第25図 S T 15竪穴住居跡及び同出土遺物

捏土器は本住居跡からのみの出土である。

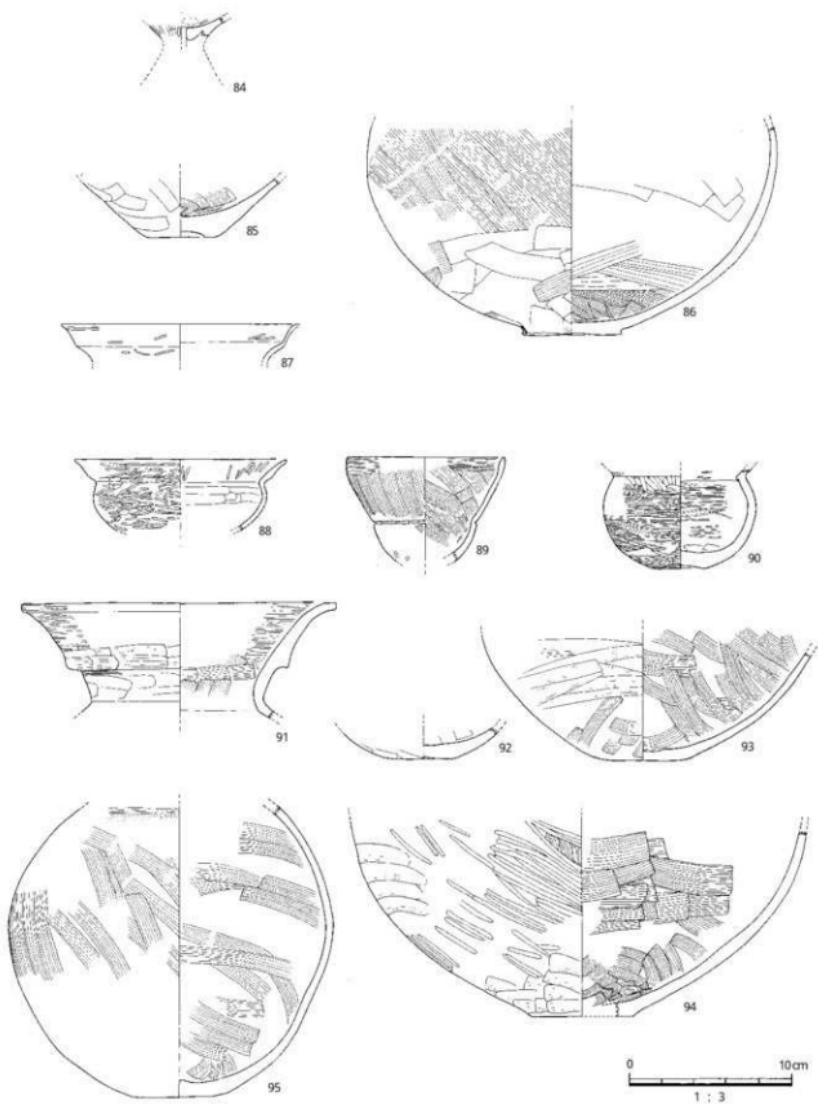
#### S T 15 竪穴住居跡（第25図）

B区北側の70-60-70区に所在する。S T 14 竪穴住居跡と同様、相対する辺の長さがそれほど等しい方形を呈する。規模は、南北軸長が2.9m、東西軸長は2.6mを測る。坪数に換算すると、2.3坪と最も小さい住居跡である。主軸方向はN-33°-Wを測る。覆土は2層である。床面中央北寄りに下半を埋め込んだ川原石が配置されていた。中央部のゆるく窪んだ部分は磨られて平滑になっていることから砥石と考えていたが、磨り面から考えると、「磨る」ためのものか「研ぐ」ためのものか不明である。

壁はゆるく立ち上がり、検出面からの深さは最大で5cmを測る。周溝は見られない。柱穴、炉等も見られない。住居跡南西隅部に南北40cm、東西35cmほどの円形を呈する貯蔵穴があり、中から甕（第25図81）が出土している。遺物は、甕1点と砥石が出土している。また上記床面中央北寄りに据え付けの砥石が見られたが、既に述べたように砥石と言えるかどうか、迷うところであるが、ここでは砥石と称しておく。



第26図 S T 17 竪穴住居跡



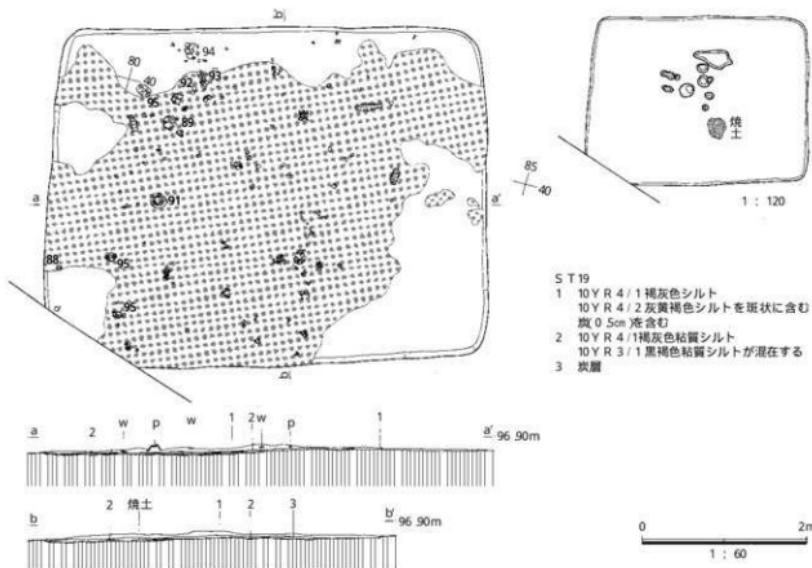
第27図 S T17・19竪穴住居跡出土遺物

### S T 17豎穴住居跡（第26図）

B区西寄り、60-80区に所在する。平面形は、南北に長い長方形を呈する。北辺が4.8mであるのに対して、南西隅が調査区外のため南辺が不明であるが、調査範囲で5.8mあり、南西隅が張り出すような形を呈するかと思われる。規模は、南北軸長が6m、東西軸長が4.8mを測り、S T 3豎穴住居跡に次いで大きな住居跡である。あるいはS T 3豎穴住居跡を超える可能性もある。主軸方向はN-4°-Wを測り、覆土は1層である。

床面ほぼ中央部と南壁近くに炭が分布する。表土除去の際、遺物包含層の直下まで下げたところ、結果的に床面をいくらか削る仕儀となってしまったが、設計変更に伴う追加調査区域において、遺物包含層の上部で重機を止め、人力で下げていったところ、床面を把握することができた。しかし、南壁部分では土色、土質の変化が認められず、良好な状態で南壁を検出することができなかった。遺物包含層中に住居の堀込面が確認できるはずはあるが、実際は極めて困難であることが判った。従ってプラン確認に際しては、遺物包含層の下面まで下げるを得ないと思われた。壁はゆるく立ち上がり、検出面からの深さは最大7cmを測る。周溝は見られない。

壁面から1mほど内側に主柱穴が認められた。北西隅部が調査区外のため確認したのは3本であるが、柱穴の配置からおそらく4本と考えられる。直径は60~80cm、深さは約40cmで、掘方の底にアタリが認められた。南東の柱穴の南東に隣接して直径60cmほどのピットが確認され



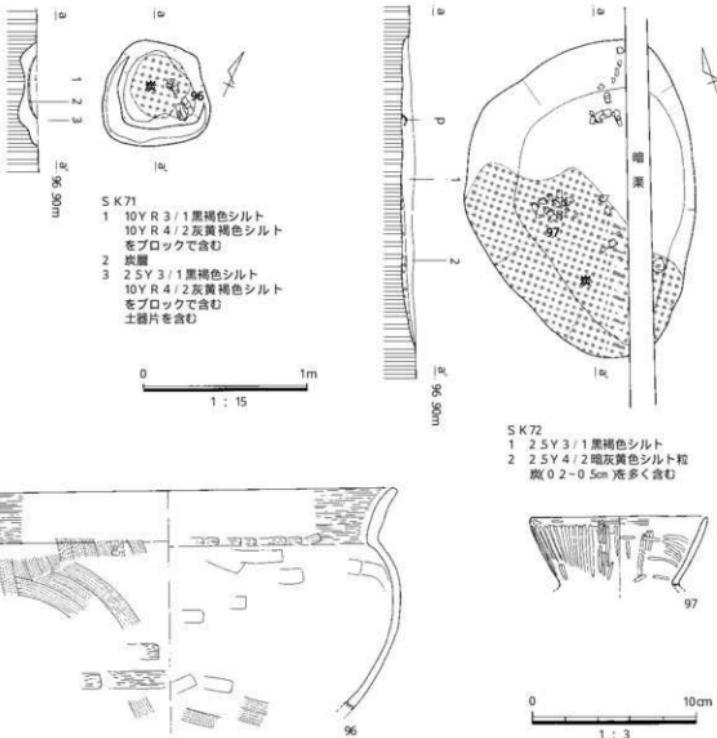
第28図 S T 19豎穴住居跡

た。柱のアタリもなく、遺物の出土もないで、性格は不明である。貯蔵穴である可能性も否定できない。周溝は見られない。遺物は、器台、壺などが出土している。

#### S T 19 穴住居跡（第28図）

D区ほぼ中央南寄り、70-80-30-40区に所在する。平面形は、東西に長く、南西隅部がやや張り出す長方形を呈する。規模は南北軸長が4.1m、東西軸長が5.3mを測る。主軸方向はN-13°48'-Wを測り、覆土は3層である。

床面全体に炭が分布し、炭化した建築部材が認められることから、焼失家屋と考えられる。東壁近くでワラ等で作った敷物かと思われる炭化物も認められた。壁はゆるく立ち上がり、検出面からの深さは最大で5cmを測る。周溝は認められず、柱穴、貯蔵穴もともに見られない。炭を全て除去した後、床面の精査を行ったところ、床面ほぼ中央部にピットが集中して認められた。ピットの性格は不明である。床面中央部やや南東寄りに、地床炉と考えられる被熱痕跡



第29図 S K 71・72土坑及び同出土遺物

が認められた。遺物は、鉢、壺などが出土している。

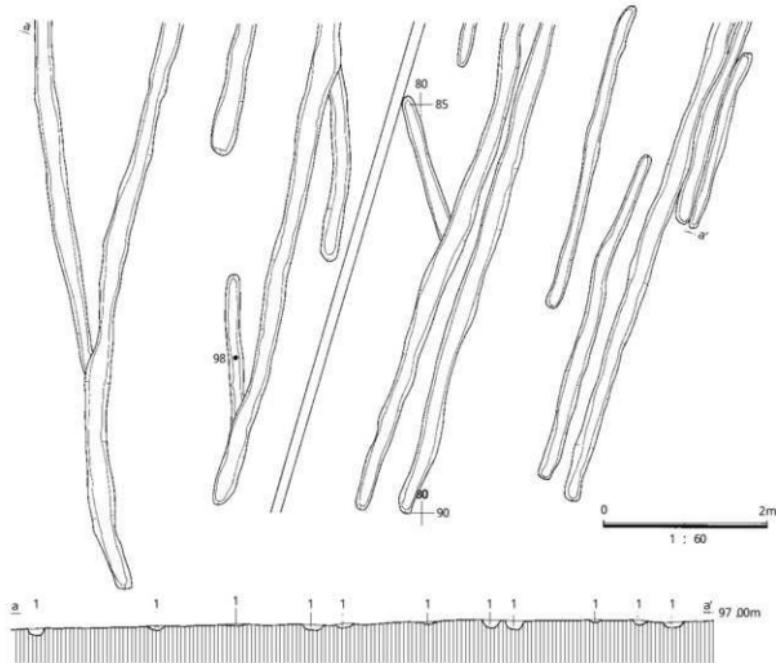
#### 4 土坑

##### S K71土坑（第29図）

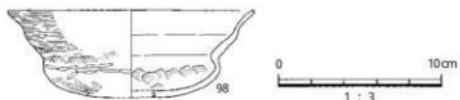
B区ほぼ中央部、70-80区に所在する。南北0.6m、東西0.7mのほぼ円形を呈する。底面は凹凸を有し、覆土1層と2層の間に炭層が見られる。覆土中から第29図96の鉢が破片の状態で出土している。

##### S K72土坑（第29図）

B区ほぼ中央部、60-80区に所在する。平面形は、西側が膨らんだ南北に長い橢円形を呈する。南北約1.9m、東西約1.4mを測る。遺構検出面からの深さは約8cmと浅く、断面はほぼ凹



1 10YR 3 / 2 黒褐色シルト  
10YR 4 / 2 灰黄褐色シルトをブロックで含む  
塊(0.5-1cm)を含む



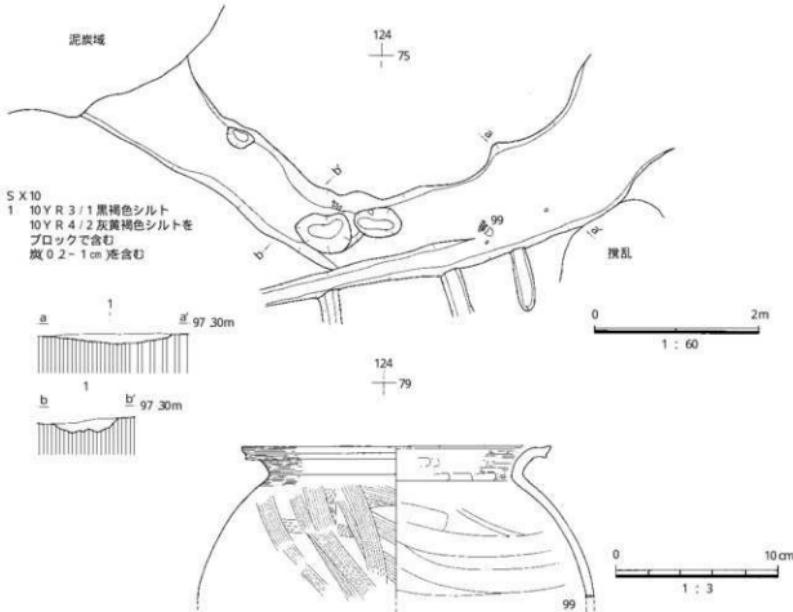
第30図 欽状遺構及び同出土遺物

状を呈する。底面は平坦であり、覆土は2層である。覆土中から第29図97の壺が出土している。

### 5 畦状遺構（第30図）

本稿で「畦状遺構」としたものは、短い溝状を呈する遺構が、近接した範囲に幾条か並行しているものを総称したもので、一部「鋤」或いは「突き鉢」の跡と見られる工具痕跡が見られたことから、これを畑の跡と考えた。

畦状遺構の方向は概ね6種類見られ、いずれも竪穴住居跡を切っていることから、ムラが機能を停止した後、この地域が畑として使用されたものと考えられる。また切り合いや方向の違いなどから、畑は数時期にわたって使用されたものと思われる。



第31図 S X 10性格不明遺構及び同出土遺物

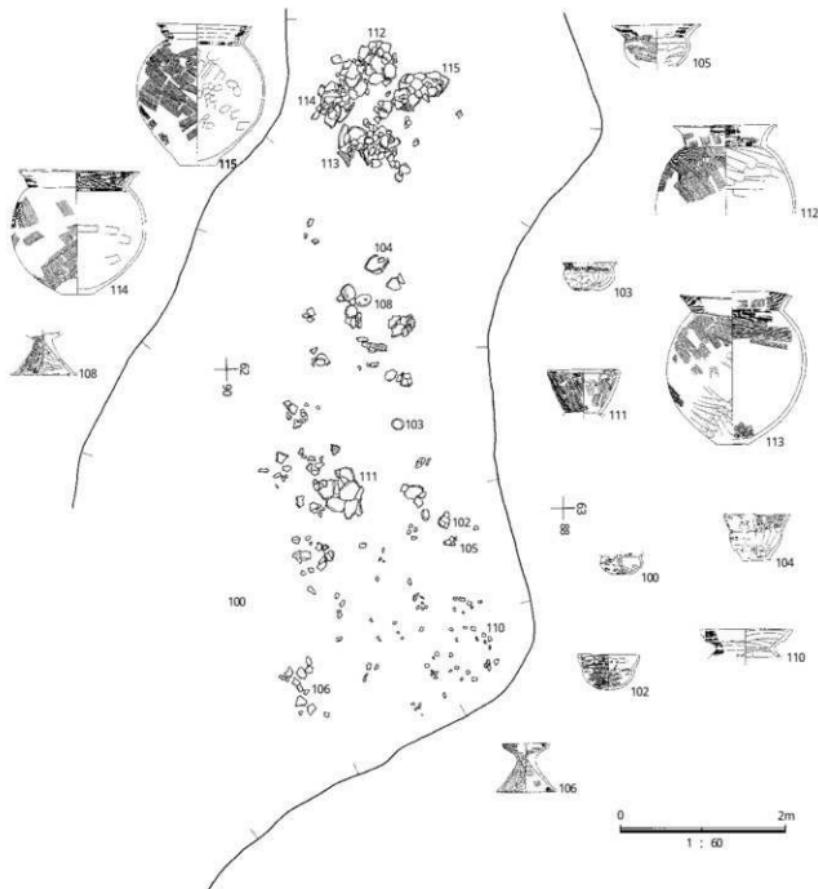
### 6 その他の遺構

#### S X 10性格不明遺構（第31図）

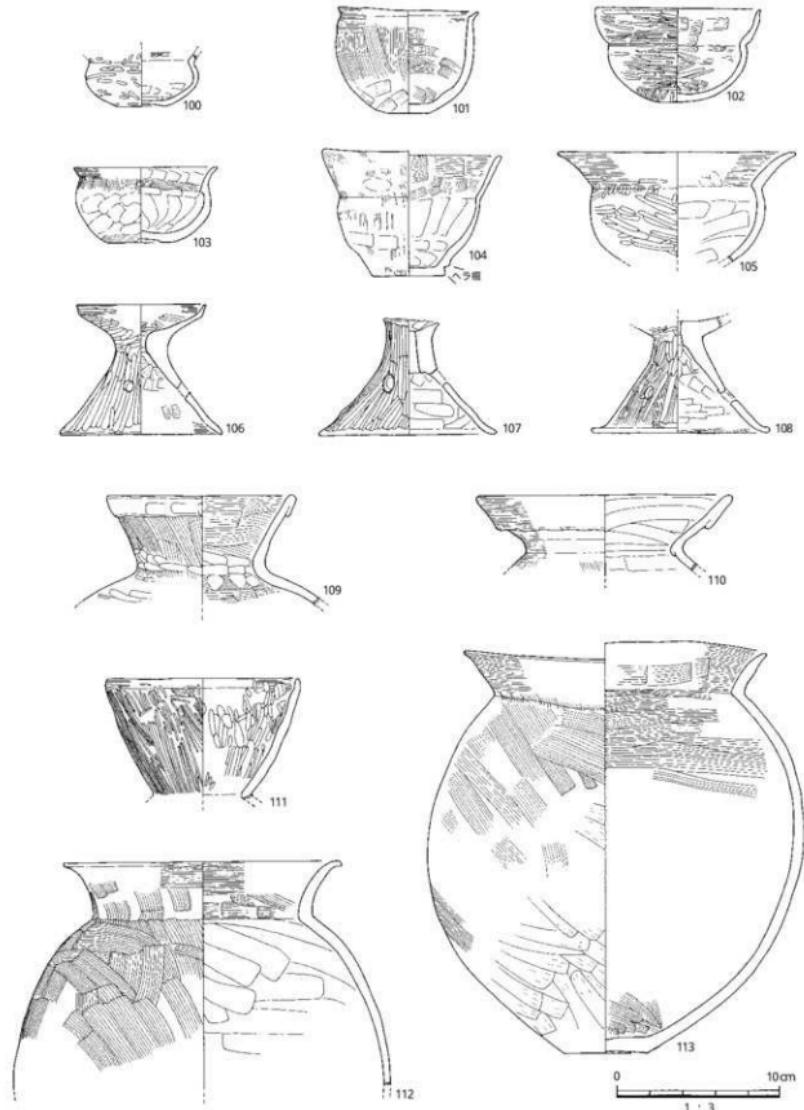
A区ほぼ中央、S T 9竪穴住居跡の南に所在する。南側に膨らむ溝状を呈し、西は泥炭区域に重なって確認できなかった。東は徐々に浅くなり、遺構の端が不明確になって終わる。深さ10~15cmを測るが底面は起伏があり定まらない。覆土は1層である。底面に落ち込みが認められるが性格は不明である。覆土中から第31図99の壺が出土している。遺構南端を畦状遺構に切られていることから、住居跡と時期をほぼ同じくするものと考えられるが、性格は不明である。

### S X 18土器捨て場（第32図）

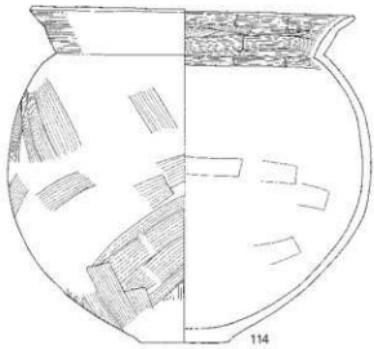
S T17竪穴住居跡の南に隣接して遺物密集地域が確認された。当初は竪穴住居跡と考えてプランを追求したが、遺物の出土状況などから土器捨て場と認識するに至った。東から続く泥炭の露頭範囲と、遺物の出土範囲がほぼ合致し、当時は地表より一段低い湿地であったことがうかがわれる。ここから出土したものと各竪穴住居跡からの出土遺物が接合する例が多くあったことから、これらの竪穴住居が機能していた時期に土器捨て場として使われ続けていたものと考えられる。



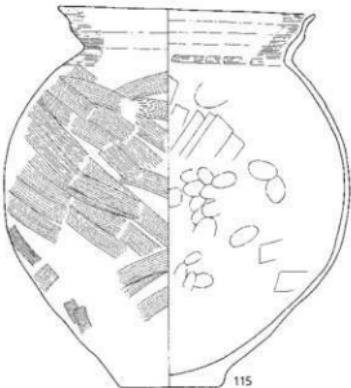
第32図 S X 18土器捨て場及び同出土遺物



第33図 S X 18土器捨て場出土遺物



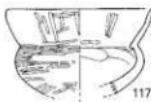
114



115



116



117



118



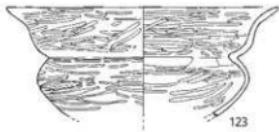
120



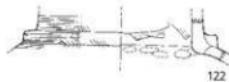
121



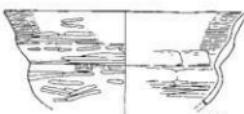
119



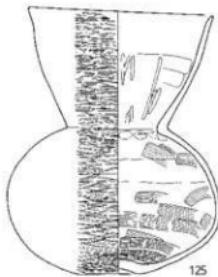
123



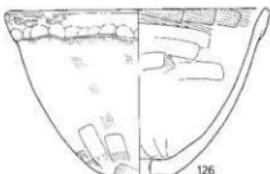
122



124



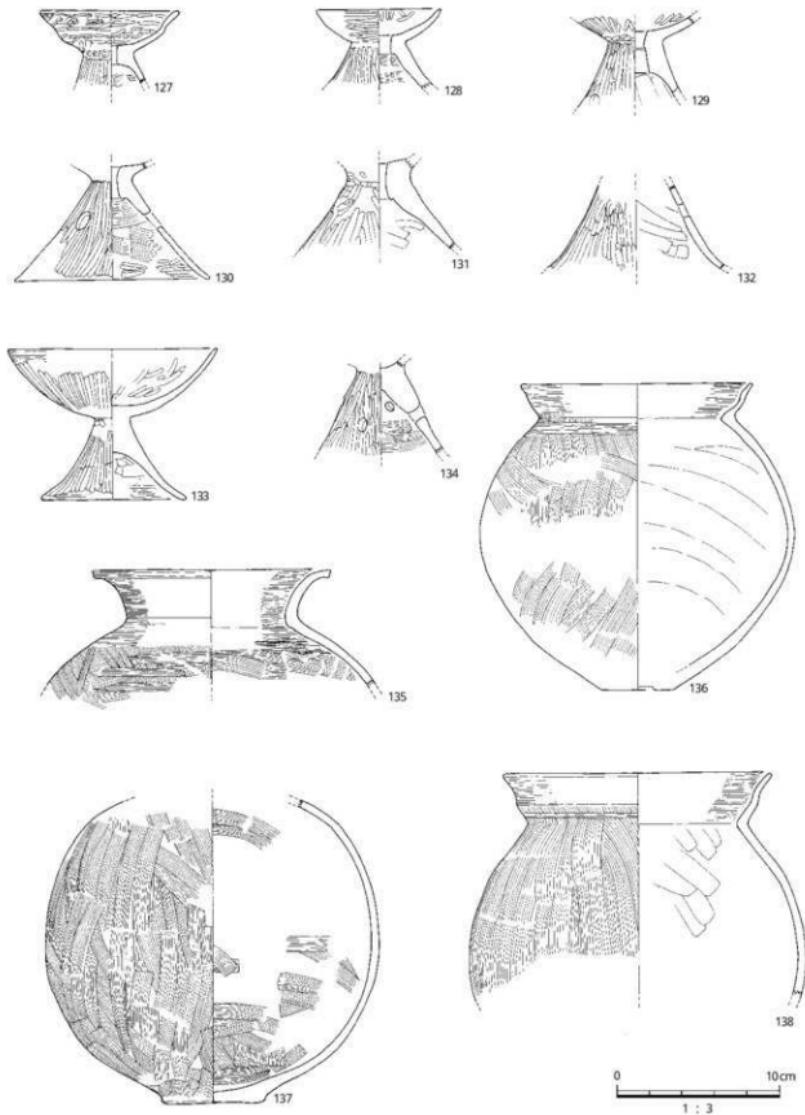
125



126

0  
1 : 3

第34図 S X18土器捨て場・包含層出土遺物



第35圖 包含層出土遺物

## 7 遺構外の遺物

遺構外の遺物には、遺構確認面（地山）の上を覆う遺物包含層から出土したものと、遺物包含層と遺構確認面の間にレンズ状に入る流れ込みの間層から出土したものがある。前者は、当該遺跡の生活痕跡と時期を同じくするものであり、後者は当該遺跡の生活痕跡が形成される以前のものである。

### 包含層の遺物（第34図116～126、第35図）

表土除去の際、遺構確認のため試掘調査の結果を基に遺物包含層の下面まで掘り下げたが、遺物が集中して確認される地点が処々に見られたため、後には遺物集中地域を残したまま表土除去を行ったところ、調査の進捗に伴い、遺物密集地域と竪穴住居跡が重なったところも多くあった。表土除去の際に取り上げた遺物は、帰属が明確でないため、ここでは包含層の遺物として取り扱ったが、おそらくは遺構内の遺物として捉えられるべきものが多いと思われる。

後出の「出土土師器觀察表」の「出土地点欄」では、包含層の遺物で出土位置が復元できたものについてはグリッド番号を付し、位置の特定ができないものについてのみ「包含層」と表記した。

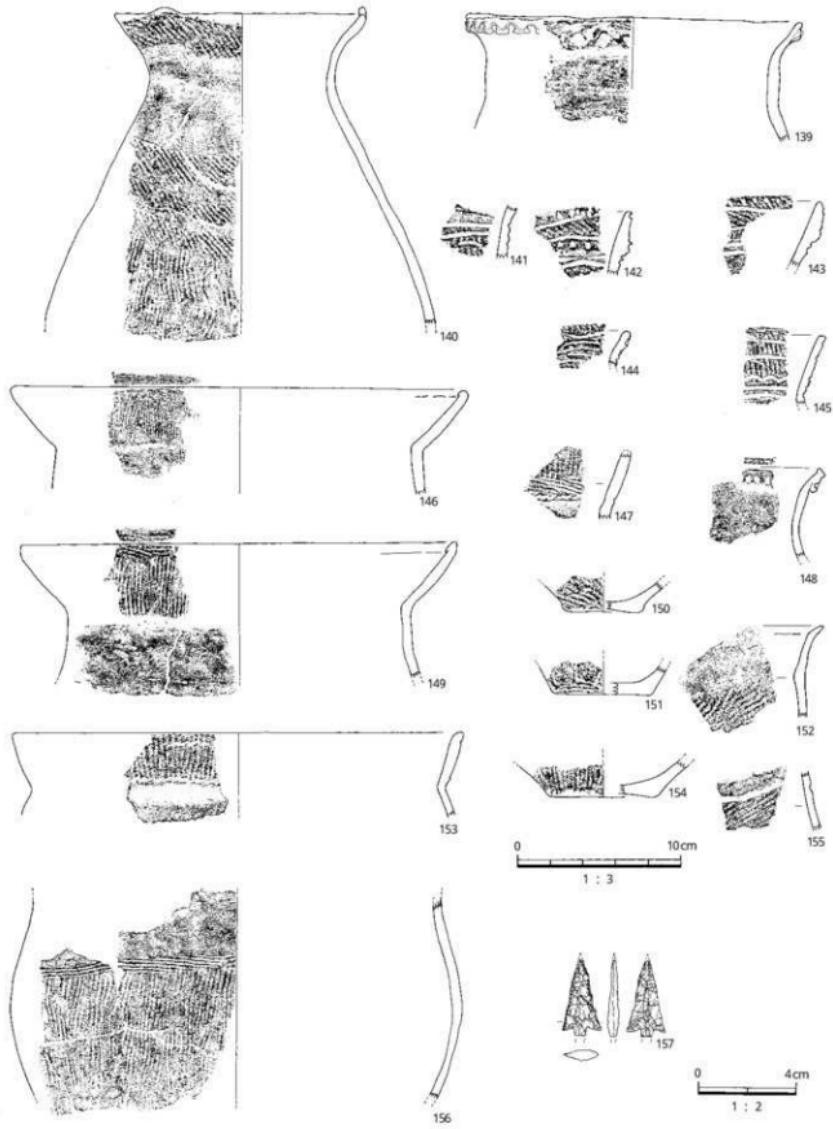
### 間層出土の遺物（第36図）

遺構確認作業時に、土色・土質の異なる範囲が観察された。黒褐色シルトに褐灰色シルトを斑状に含むもので、断面観察の結果、遺物包含層と遺構確認面（地山）との間にレンズ状に入る、流れ込みの間層と認識されたが、その層中より前時代の遺物が出土している。遺構の堀込面は遺物包含層中に在ると思われることから、この度の調査に伴う生活痕跡と直接結びつくものとは考えられないが、第36図にその概要を採録した。

これらの遺物は、当初、弥生後期の天王山式に属するものと見られたが、天王山式土器の特徴である交互刺突文などが見られず、その交互刺突が変化したと見られる、指頭による連続押圧が施された土器などが含まれているため、天王山式に続く時期、その流れを受けた一群と考えるに至った。この時期の土器型式として、福島県では踏瀬大山式があるが、本県内では該当する土器型式は設定を見ていない。

この時期は古墳時代に移り変わる直前の時期とされているが、当該土器群と古墳時代の土器との間に、連續性があまり見られないのが特徴である。

流れ込みの間層から出土した、これらの遺物は、弥生時代から古墳時代に移り変わるという時期に、この付近で人々が生活していた事を物語るものであり、弥生時代から古墳時代への移行がどのように行われたのかを探る上で、興味深い資料ではある。



第36図 間層出土遺物

表1 穴住居跡観察表

遺構番号	位置	平面形	主軸方向	規模(m)	深さ(cm)	長辺方向	ピット 貯蔵穴	炉	柱穴	出土遺物 (主なもの)	備考
S T 3	140- 90	方形	N- 35- W	6.1× 5.4	3	南北	貯蔵穴1 (南東隅)	地床炉	なし	土師器 (鉢4, 壺1, 瓢5)	焼失家屋
S T 4	140- 150 - 80- 90	方形	N- 38- W	4.7× 4.3	5	南北	貯蔵穴1 (南東隅)	地床炉	なし	土師器 (高杯1, 鉢3, 壺1, 瓢2)	焼失家屋
S T 5	130- 70- 80	方形	N- 34.5- E	(5.5)× 5.5	6	不明	貯蔵穴1 (南東隅)	地床炉	なし	土師器 (鉢3, 壺4, 瓢4) 砥石1	焼失家屋
S T 6	130- 70- 80	方形	N- 9- E	4.9× 4.4	0	南北		地床炉	なし		
S T 7	120- 130 - 70	長方形	N- 10.5- E	4.6× 3.5	12	南北			なし	土師器 (器台2, 鉢2, 壺4, 瓢2, 盖1)	
S T 8	120- 130 - 80	長方形	N- 16- W	4.5× 3.6	11	南北			なし	土師器 (瓢7, 盖1)	
S T 9	120- 70	方形	N- 39- W	(5.7)× (2.5)	3	不明	ピット1		なし	土師器 (壺1)	
S T 11	110- 80	長方形	N- 24.5- W	3.3× 4.4	7	東西			なし	土師器 (鉢1, 瓢1, 盖1)	
S T 12	90- 90	方形?	N- 20- W	(2.2)× (1.1)	5	不明			不明		南東隅部のみ遺存
S T 13	80- 60- 70	方形	N- 36.5- W	3.9× 4.2	9	東西	貯蔵穴1 (南西隅)	地床炉 (2カ所)	なし	土師器 (壺5, 瓢3)	焼失家屋
S T 14	70- 80 - 70	方形	N- 17- W	3.4× 3.1	6	南北		地床炉	なし	土師器 (器台2, 鉢2, 壺3, 瓢8, 手程土器4)	焼失家屋
S T 15	70- 60- 70	方形	N- 33- W	2.9× 2.6	5	南北	貯蔵穴1 (南西隅)	不明	なし	土師器 (瓢1) 砥石2	
S T 17	60- 80	方形	N- 4- W	6× 4.8	7	南北	ピット1 (南東隅)	不明	4? (北西部調査区外のため不明)	土師器 (器台1, 壺2)	
S T 19	70- 80 - 30- 40	長方形	N- 13.8- W	4.1× 5.3	5	東西		地床炉	なし	土師器 (鉢4, 壺5)	焼失家屋

表2 土師器觀察表(1)

件目N	種類	計測値(=)			胎土 焼成	色調	調査技法				備考
		口径	底径	器高			□縦試 外面・受部	体試 腹部 外面	□縦試 内面・受部	体試 腹部 内面	
1	鉢	85	15	56	細 口	白褐色 赤褐色	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	ヘラナデ	S T 3	外面朱影
2	鉢	104	40	57	細 堅	赤褐色	ヨコナデ	ヘラナデ、ミガキ	ヨコナデ	ナデ、ヘラナデ	S T 3
3	鉢	112	—	(51)	細 口	褐色	ナデ、ミガキ	ハケメ→ミガキ	ハケメ、ミガキ	ミガキ	S T 3
4	甕	—	—	(33)	細 口	白褐色	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	S T 3
5	甕	152	—	(40)	細 堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ ヘラナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	S T 3
6	甕	132	—	(47)	細 口	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	S T 3
7	鉢	99	41	58	細 口	褐色	ヨコナデ→ハケメ	ヘラナデ、ミガキ	ヨコナデ→ハケメ	ナデ	S T 3
8	甕	136	30	159	細 口	暗褐色	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ、ハケメ	ヨコナデ、ハケメ	ヘラナデ	S T 3 E K I (軒轅穴)
9	甕	138	21	150	粗 口	褐色	ハケメ→ヘラナデ	ハケメ、ヘラナデ	ハケメ	ヘラナデ	S T 3
10	壺	—	44	(89)	細 堅	赤褐色	ミガキ、ヘラナデ	ミガキ	ヘラナデ、ハケメ	ヘラナデ	外面朱影・細いミガキ
11	鉢	152	—	(83)	細 堅	白褐色	ミガキ	ミガキ	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ、ミガキ	S T 4
12	高環	100	78	83	細 堅	赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ→ミガキ	ナデ	ハケメ→ヨコナデ	S T 4
13	鉢	200	42	101	細 口	赤褐色	ヨコナデ→ミガキ	ミガキ、ヘラナデ	ヘラナデ→ヨコナデ	ヘラナデ→ミガキ	S T 4
9	甕	200	75	277	粗 口	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ、ハケメ→ミガキ	ヨコナデ	ヘラナデ	S T 4
15	鉢	240	—	(75)	細 堅	白褐色	ハケメ→ヨコナデ+ ヘラナデ→ミガキ	ヨコナデ→ミガキ	ミガキ	S T 4	
16	甕	—	66	(53)	粗 口	褐色	ヘラナデ、ハケメ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	S T 4
17	壺	113	—	(35)	細 堅	白褐色	ハケメ→ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	直口	
18	鉢	103	32	66	細 堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ、ナデ	S T 5
19	鉢	82	24	61	細 口	褐色	ヨコナデ、ハケメ	ハケメ、ケズリ	ハケメ、ヘラナデ	ナデ	S T 5
20	鉢	143	32	64	細 堅	赤褐色	ヨコナデ→ミガキ	ミガキ、ヘラナデ	ヨコナデ→ミガキ	ミガキ	S T 5
21	甕	179	42	(226)	粗 口	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ→ナデ	ハケメ、ヘラナデ	S T 5
11	甕	164	—	(201)	粗 口	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ、ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	S T 5
23	甕	223	70	246	粗 口	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ、ハケメ	ヨコナデ、ハケメ	ナデ、ヘラナデ	S T 5
24	甕	—	72	(36)	粗 口	暗褐色	ハケメ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	S T 5
25	壺	—	36	(50)	粗 口	褐色	ナデ、ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	S T 5
26	甕	119	42	109	粗 口	白褐色	ミガキ	ヘラナデ、ミガキ	ミガキ	ヘラナデ	S T 5
28	壺	127	65	225	細 口	赤褐色	ヨコナデ→ミガキ	ハケメ→ミガキ	ヨコナデ、ミガキ	ナデ、ヘラナデ、 ミガキ	S T 5
12	甕	—	73	(322)	細 口	赤褐色	ミガキ	ヘラナデ、ミガキ	ミガキ	ミガキ、ヘラナデ	S T 5 E K I (軒轅穴)
30	壺	99	—	(54)	細 口	白褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ヘラナデ	ヘラナデ	S T 5
31	鉢	—	—	(43)	粗 口	赤褐色	ミガキ	ナデ、ミガキ	ナデ	ナデ	S T 7
32	器台	78	—	(38)	細 口	白褐色	ヨコナデ→ミガキ	ナデ、ミガキ	ミガキ	ヘラナデ	S T 7
33	器台	—	—	(51)	細 堅	白褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ハケメ	S T 7
34	壺	186	—	(69)	粗 口	褐色	ハケメ→ヘラナデ	ハケメ→ヘラナデ	ヘラナデ→ナデ	ヘラナデ、ハケメ	S T 7
15	鉢	160	—	(46)	細 堅	白褐色	ミガキ	ハケメ→ミガキ	ミガキ	ミガキ	S T 7
36	壺	130	—	(60)	粗 口	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	S T 7
37	壺	—	—	(63)	細 口	赤褐色	ミガキ	ミガキ、ヨコナデ	ミガキ	ナデ	S T 7
38	壺	50	—	(47)	粗 口	褐色	ヘラナ六つまみ	ミガキ、ヘラナデ	ヘラナ六つまみ	ナデ、ヘラナデ	S T 7
39	甕	—	64	(46)	粗 口	褐色	ミガキ	ハケメ	ヘラナデ	ヘラナデ	S T 7
40	壺	—	30	(89)	細 堅	白褐色	ミガキ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	外面朱影

表3 土師器觀察表(2)

件目N	種類	計測値(=)			胎土	焼成	色調	調査技法				出土地点	備考
		口径	底径	器高				口縁部 内面・受部	体部 腹部 外面	口縁部 内面・受部	体部 腹部 内面		
41	甕	(158)	—	(42)	粗	書	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	S T 7	
42	甕	(172)	—	(62)	粗	書	褐色	ヨコナデ+ハケメ	ハケメ	ヨコナデ+ヘラナデ	ヘラナデ	S T 8	一部分 S X 18より出土
43	甕	110	—	(31)	撇	堅	赤褐色	ハケメ+ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ+ヘラナデ	ハケメ	S T 8	
44	甕	(120)	—	(32)	粗	書	褐色	ヨコナデ+ヘラナデ		ヨコナデ+ヘラナデ		S T 8	
45	甕	(223)	—	(70)	粗	書	褐色	ヨコナデ、ヘラナデ	ハケメ	ヨコナデ+ヘラナデ	ヘラナデ	S T 8	
46	甕	(162) (142)	(160)	粗	書		赤褐色	ヨコナデ+ハケメ	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ、ハケメ	S T 8	
47	甕	—	45	(253)	粗	書	暗褐色		ハケメ		ハケメ	S T 8	丸みを持った平底
48	甕	163	—	(50)	粗	書	赤褐色	ヨコナデ+ヘラナデ	ハケメ	ヨコナデ、ヘラナデ	ヘラナデ	S T 8	外面焼付着
49	壺	—	49	(36)	粗	書	褐色		ハケメ		ハケメ	S T 8	外面底部中央がくぼむ
50	壺	(179)	—	(72)	細	書	褐色	ハケメ+ヨコナデ、 ハケメ+ミガキ		ヘラナデ	ハケメ	S T 9	
51	鉢	(100)	—	(41)	撇	堅	白褐色	ミガキ				S T 11	外・内面摩滅
52	甕	(170) (60)	226	粗	書		褐色	ハケメ+ヨコナデ	ハケメ+ヘラナデ	ヨコナデ	ヘラナデ、ハケメ	S T 11	
53	甕	—	48	(24)	粗	書	褐色		ハケメ		ハケメ	S T 11	多孔、一部分80~80より出土
54	壺	118	—	122	粗	書	白褐色	ミガキ	ハケメ+ミガキ	ヘラナデ	ヘラナデ	S T 13	外・内面焼付着
55	甕	183	—	(205)	粗	書	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	S T 13	輪様み痕、外面焼付着
56	壺	150	—	(70)	粗	書	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ハケメ	S T 13	
57	壺	(133)	—	(35)	粗	書	暗褐色	ヨコナデ、ヘラナデ		ヨコナデ、ヘラナデ		S T 13	
58	甕	—	60	(27)	粗	書	白褐色		ヘラナデ、ハケメ			S T 13	内面摩滅
59	壺	—	—	(29)	細	書	白褐色				ナデ	S T 13	破片資料、線描
60	壺	156	76	(330)	粗	施錫	褐色	ヨコナデ	ミガキ、ヘラナデ		ヘラナデ、ハケメ	S T 13	口縁部内面摩滅
61	甕	232	—	(76)	粗	書	赤褐色	ヨコナデ	ハケメ		ヘラナデ	S T 13	外・内面摩滅、外面焼付着
62	置台	—	—	(48)	細	堅	白褐色		ミガキ		ヘラナデ	S T 14	
63	鉢	77	39	35	粗	書	暗褐色		ハケメ		ハケメ	S T 14	
64	壺	140	—	(47)	撇	堅	褐色	ヨコナデ+ミガキ		ヨコナデ+ミガキ、 ハケメ		S T 14	外・内面朱彩、一部分 S G X 18 より出土
65	置台	—	120	(41)	撇	堅	白褐色		ミガキ		ヨコナデ+ヘラナデ	S T 14	脚部に3孔
66	鉢	94	39	48	粗	書	褐色		ナデ	ハケメ	ナデ、ヘラナデ	S T 14	
67	壺	150	—	(44)	細	堅	褐色	ミガキ		ヘラナデ、ミガキ		S T 14	
68	甕	—	—	(22)	細	書	赤褐色	ヨコナデ				S T 14	内面摩滅
69	甕	—	—	(37)	撇	堅	白褐色	ハケメ		ハケメ+ヨコナデ		S T 14	
70	甕	129	—	(27)	粗	書	赤褐色	ヨコナデ、ヘラナデ		ヘラナデ		S T 14	
71	壺	159	—	(54)	細	堅	白褐色	ハケメ+ヨコナデ+ ミガキ	ハケメ	ヨコナデ、ミガキ		S T 14	
72	甕	161	—	(95)	粗	書	褐色	ハケメ+ヨコナデ	ヘラナデ、ハケメ	ヘラナデ	ヘラナデ	S T 14	
73	甕	150	—	(56)	細	堅	褐色	ハケメ+ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	S T 14	
74	甕	170	—	(44)	撇	堅	褐色	ハケメ+ヨコナデ		ヨコナデ、ハケメ	ハケメ	S T 14	
75	甕	200	—	(58)	粗	書	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	S T 14	
76	甕	182	—	(66)	粗	書	褐色	ヘラナデ	ハケメ	ハケメ+ヨコナデ	ヘラナデ	S T 14	
77	鉢	50	27	(17)	撇	堅	白褐色		ナデ		ナデ	S T 14	手捏土器
78	鉢	28	20	14	細	堅	白褐色		ナデ		ナデ	S T 14	手捏土器
79	鉢	—	32	19	細	堅	白褐色		ナデ		ヘラナデ	S T 14	手捏土器

表4 土師器觀察表(3)

件目N	種類	計測値(=)			胎土	焼成	色調	調整技法			出土地点	備考		
		口径	底径	器高				口縁部 外面・受部 外面	体部 腹部 外面	口縁部 口部・受部 内面				
24	鉢	—	(39)	(34)	粗	青	褐色		ナデ		ナデ	S T14	手捏土器	
25	甕	—	60	(27)	細	青	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	S T15	E.K.3 (野辺六) 外面底部下半焼付着	
84	盤台	—	—	(12)	緻	堅	褐色		ミガキ		ナデ、ミガキ	S T17	E.K.3 (野辺六) 受部の一部分	
85	甕	—	40	(35)	粗	青	褐色		ヘラナデ		ハケメ	S T17	底部中央がくぼむ	
86	甕	—	59	(127)	緻	堅	褐色		ハケメ、ヘラナデ		ハケメ、ヘラナデ	S T17+ S X18		
87	鉢	(146)	—	(22)	緻	堅	白褐色	ヨコナデ→ミガキ		ミガキ		S T19		
88	鉢	130	—	(44)	細	青	白褐色	ヨコナデ→ミガキ	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ	S T19		
89	鉢	96	—	(65)	細	堅	白褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ、ハケメ	ハケメ	S T19		
90	鉢	—	31	(60)	緻	堅	赤褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ、ヘラナデ	S T19		
91	甕	192	—	(70)	粗	青	褐色	ハケメ→ヨコナデ→ ヘラナデ		ヨコナデ、ハケメ		S T19		
92	甕	—	(40)	(18)	細	青	暗褐色		ヘラナデ		ヘラナデ	S T19		
93	甕	—	41	(78)	細	青	暗褐色		ヘラナデ、ハケメ		ハケメ	S T19	底部内面に炭化物付着	
94	甕	—	62	(120)	粗	青	褐色		ヘラナデ→ミガキ		ハケメ	S T19		
95	甕	—	47	(177)	粗	青	白褐色		ハケメ→ヨコナデ		ハケメ	S T19		
96	甕	280	—	(131)	細	青	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ→ヘラナデ	ヘラナデ、ハケメ	S K71	外面煤付着	
97	甕	107	—	(53)	緻	堅	白褐色	ヨコナデ→ミガキ		ヨコナデ、ミガキ		S K72	直口	
30	鉢	98	152	—	(53)	細	青	赤褐色	ハケメ→ヨコナデ	ミガキ				輪郭過強
31	甕	199	190	—	(93)	粗	青	暗褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヘラナデ→ヨコナデ	ヘラナデ	S X10	外面煤付着
108	鉢	—	30	(33)	緻	堅	白褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ	S X18		
101	鉢	86	26	63	粗	青	白褐色	ヨコナデ	ハケメ→ヨコナデ→ ヘラナデ	ヨコナデ	ハケメ	S X18	外面白褐色、内面赤褐色	
102	鉢	102	22	57	緻	堅	白褐色	ミガキ	ミガキ	ハケメ	ハケメ、ミガキ	S X18		
103	鉢	88	41	46	細	堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ	ハケメ→ヘラナデ	ヘラナデ	S X18		
104	鉢	110	43	78	細	青	褐色	ナデ、ハケメ	ヘラナデ、ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	S X18		
105	鉢	146	—	(67)	細	堅	暗褐色	ヨコナデ、ミガキ	ミガキ	ヨコナデ、ナデ	ヘラナデ	S X18		
33	盤台	80	100	79	細	青	白褐色	ヨコナデ→ミガキ	ミガキ	ヨコナデ、ミガキ	ヘラナデ	S X18	脚部に3孔	
107	盤台	—	107	(71)	緻	堅	褐色		ミガキ		ヘラナデ、ナデ	S X18		
108	盤台	—	110	(71)	緻	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ→ハケメ→ ミガキ	ヘラナデ、ハケメ	S X18	脚部に3孔、ハケメ調整痕が 残る	
109	甕	116	—	(67)	粗	青	褐色	ハケメ→ヘラナデ	ヘラナデ、ハケメ	ハケメ、ヘラナデ	ハケメ→ナデ	S X18		
110	甕	154	—	(44)	粗	青	赤褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヘラナデ	ヘラナデ	S X18		
111	甕	118	—	(73)	細	青	褐色	ヨコナデ→ミガキ		ヨコナデ→ミガキ		S X18	直口、胎土異質	
112	甕	170	—	(137)	粗	青	暗褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ	S X18	外面煤付着	
113	甕	187	52	250	粗	青	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ナデ、ハケメ	ヘラナデ	ハケメ	S X18		
114	甕	200	55	204	粗	青	暗褐色	ヨコナデ	ハケメ、ヘラナデ	ハケメ	ハラナデ	S X18	外面煤付着	
115	甕	158	60	233	粗	青	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ナデ、ヘラナデ	S X18		
116	鉢	120	15	50	細	青	赤褐色	ミガキ		ミガキ	ミガキ	120-70	外・内面摩滅、底部がわざか にくぼむ	
34	117	鉢	89	—	(51)	粗	青	褐色	ミガキ	ミガキ	ハケメ→ナデ	包含層		
118	鉢	67	17	28	緻	堅	褐色	ナデ	ケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	包含層		
119	鉢	67	27	41	細	青	赤褐色		ヘラナデ、ハケメ	ヨコナデ	ハケメ	100-90		
120	鉢	118	40	41	緻	堅	褐色	ヨコナデ→ミガキ	ミガキ	ヨコナデ→ミガキ	ミガキ	90-40		

表5 土師器觀察表(4)

擇因No.	器種	計測値(=)			胎土 焼成	色調	調査技法			出土地点	備考	
		口径	底径	器高			口縁部外筋・受部 外面	体表・製部 外面	口縫部环筋・受部 内面			
121	鉢	77	48	49	粗 硬	白褐色	ハケメ		ヘラナデ	90- 40		
122	壺	-	-	(25)	粗 異	白褐色	ハケメ→ヨコナデ		ヘラナデ	指頭圧痕	90- 40	
123	鉢	(168)	-	(68)	細 硬	白褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	80- 40	額部破片、額部に突帯貼付	
124	鉢	149	-	(57)	微 硬	褐色	ハケメ→ミガキ	ミガキ	ヨコナデ、ヘラナデ	ミガキ、ヘラナデ	110-130 - 80	
125	壺	113	40	163	粗 異	白褐色	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ→ミガキ	ミガキ、ハケメ	100-110 - 70-80	直口
126	瓶	164	38	101	粗 異	褐色	ハケメ	ヘラナデ、ハケメ	ハケメ、ヘラナデ	ハケメ、ヘラナデ	120- 80	単孔、口縁部に指頭圧痕
127	壺	85	-	(45)	微 硬	赤褐色	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ	110- 80		
128	壺	76	-	(48)	粗 異	褐色	ミガキ	ミガキ	ハケメ	90- 90		
129	壺	-	-	(51)	粗 異	赤褐色	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ	100-110 - 70- 80		
130	壺	-	-	(72)	微 硬	白褐色	ミガキ	ミガキ	ハケメ、ミガキ	包含層	脚部に3孔力	
131	壺	-	-	(55)	粗 異	褐色	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ	100 - 70- 40		
132	壺	-	-	(53)	微 硬	白褐色	ハケメ→ミガキ	ミガキ	ヘラナデ	120- 80	脚部に3孔力	
133	窓坏	128	89	91	微 硬	赤褐色	ヨコナデ+ミガキ	ミガキ	ヨコナデ→ヘラナデ	100-110 - 70- 80		
134	壺	-	-	(54)	細 硬	褐色	ハケメ→ミガキ		ハケメ	包含層	脚部上下2段に計6孔	
135	壺	144	-	80	微 硬	赤褐色	ヨコナデ	ハケメ→ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ→ヨコナデ	90- 50	
136	甕	141	44	187	細 異	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	包含層	底部中央がくぼむ
137	壺	-	60	(185)	粗 異	白褐色		ハケメ		ハケメ	90- 50	
138	甕	166	-	(135)	粗 異	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	80- 40	

表6 弥生土器觀察表

擇因No.	器種	出土地点	層位	特徴(外面)			特徴(内面)			図版
				口縁波状	口縫押捏压痕	額部無文帯、体部縲文	口面丸味、ナデ調整	口面に斜り棱、ナデ調整	ナデ調整	
139	甕	140- 80	IV	口縫波状、口縫押捏压痕、額部無文帯、体部縲文			口面丸味、ナデ調整			18
140	壺	140- 80	IV	口縫突出、口縫文帯、額部無文帯、体部縲文			口面に斜り棱、ナデ調整			18
141	甕	140- 80	IV	額部無文帯→体部縲文、曲線文			ナデ調整			18
142	甕	140- 80	IV	口縫位移突文、口縫文帯→山形沈縲文			ナデ調整			18
143	甕	140- 80	IV	口縫位移突文、口縫文帯→山形沈縲文			ナデ調整			18
144	甕	140- 80	IV	口縫文、口縫部邊弧文			ナデ調整			18
145	甕	140- 80	IV	口縫文文帯→山形沈縲文、額部平行沈縲文			ナデ調整			18
146	甕	140- 80	IV	口縫押捏压痕、口縫文、攢系文帯、額部無文帯			口面に斜り、ナデ調整			18
147	甕	140- 80	IV	口縫部無文帯、額部無文帯			ナデ調整			18
148	甕	140- 80	IV	口縫部突文、額部無文帯、体部攢系文、口唇部角			口面に軽い棱、ナデ調整			18
149	甕	140- 80	IV	口縫部外反、口縫部無文帯、体部縲文			ナデ調整			18
150	-	140- 80	IV	体部縲文、底部ケズリ調整			ナデ調整			18
151	-	140- 80	IV	体部縲文、体部下端横位捺糸文、底部ケズリ調整			ナデ調整			18
152	甕	140- 80	IV	口縫部外反、口縫部無文帯、体部縲文			ナデ調整			18
153	甕	140- 80	IV	口縫押捏压痕、口縫部縲文、額部無文帯			口面に棱、ナデ調整			18
154	-	140- 80	IV	体部縲文系文、底部ナデ調整			ナデ調整			18
155	壺	140- 80	IV	体部縲文線、崩消縲文			ナデ調整			18
156	壺	140- 80	IV	額部無文帯、体部上端横位捺糸文、体部縲位捺糸文			ナデ調整			18

表7 石製品觀察表

擇因No.	種別	出土地点	層位	計測値(=)			重さ(g)	備考	図版
				長さ	幅	厚さ			
11	27	S T 5	床面	153	30	35	248	4面の使用	13
25	82	S T 15	床面	90	43	24	(103)	磨面 2面 一部分はS X 18より出土	13
36	157	石鏃	140- 80	IV	223	72	6 162	片面砥面	13

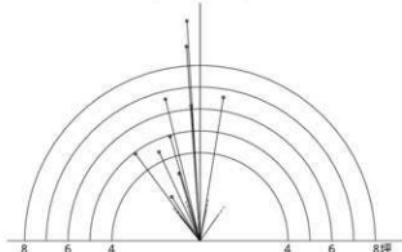
#### IV 調査のまとめ

主要地方道天童寒河江線道路改良事業に伴う菖蒲江1遺跡の発掘調査は、天童市高備字菖蒲江他に所在する道路改良予定地3480m<sup>2</sup>を対象に調査した。その結果、古墳時代前期に属すると考えられる竪穴住居跡、土坑、畝状造構などの遺構や土器捨て場、土師器を主体とする整理箱24箱の遺物を得た。このうち、竪穴住居跡と主要な遺物である土師器について整理し、まとめとする。

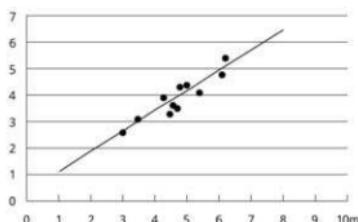
竪穴住居跡は計14棟を検出したが、そのうち、規模の判明したもの11棟を主体に主軸方向や平面規格、面積などについて見ると次のようになる。

主軸方向は座北を中心に概ね4つのグループに分けることができる。A：15度以上西偏するもの（8, 9, 11, 12, 13, 14, 15）、B：15度未満西偏するもの（3, 4, 17, 19）、C：15度未満東偏するもの（6, 7）、d：15度以上東偏するもの（5）である。また長軸の方向は、東西に長軸を持つもの（11, 13, 19）と、南北に長軸を持つもの（3, 4, 6, 7, 8, 14, 15, 17）とに二分される。

面積から見ると、4坪未満の小型住居（14, 15）、8坪以上の大型住居（3, 17）、その中間の中型住居とに分類することが可能である。中型の住居跡はさらに4坪台のもの（7, 8, 11, 13）と6坪台のもの（4, 6, 19）とに分かれる。



第37図 竪穴住居跡の主軸方向と規模



第38図 竪穴住居跡散布図

平面規格については、規模の判明する住居跡11棟を対象に、短軸を100として長軸の割合が110未満のものを正方形、120以上のものを長方形と仮に呼称すると、正方形は2棟（4, 13）、長方形は5棟（7, 8, 11, 17, 19）である。また、向かい合う辺の長さの差が大きいほど歪みを呈するので、それぞれの辺差の軸長に対する割合の合計が、軸長の10%未満のものを歪度が小、20%以上を大とすると、S T 6, 8が大、S T 13, 14, 15は小となる。

これらを組み合わせても、グループを構成することはできず、主軸・長軸方向・面積の間に有意差は見られない。また規模の判明している11棟の住居跡を、長軸をX、短軸をYとしてプロットすると、全体が  $y = 0.78x + 0.351$  で直線回帰し、回帰式の標準誤差は0.326となる。これから、長軸と短軸の比率は基本的に同様と考えることができ、さほど隔たらない時期にこれらの住居が作られたであろう事が想定される。

この度の調査で種々の遺物が得られたが、主体を占める土師器の把握のため、形態分類を行つた。器種は器台、高坏、鉢、壺、甕、蓋に分類した。以下にその概要を述べる。

#### 器台

小型器台である。全体を窺えるものが少ないが、受部や脚部の形状、受部貫通孔の有無、脚部の円孔の数などで分類した。

器台 A は、内弯する小さな受部をもち、外反するか、あるいは直線的に外下方にのびる脚部に 3 孔を有するもので、受部が丸味を持って口縁部に至るもの (A 1) と口縁端部をつまみ出すもの (A 2)、口縁端部が外反するもの (A 3) がある。

器台 B は、受部形状の不明なものを一括した。脚部の形状などから、外反あるいは直線的に外下方にのびる脚部に 3 孔を有するもの (B 1)、貫通孔がなく脚部に 6 孔を穿つもの (B 2)、脚部上端が中実の棒状を呈し、少し下がったところから脚が開くもの (B 3) がある。

#### 高坏

小型高坏である。脚部が「八」の字状に開くもの (A) と脚部が内弯氣味に開くもの (B) がある。

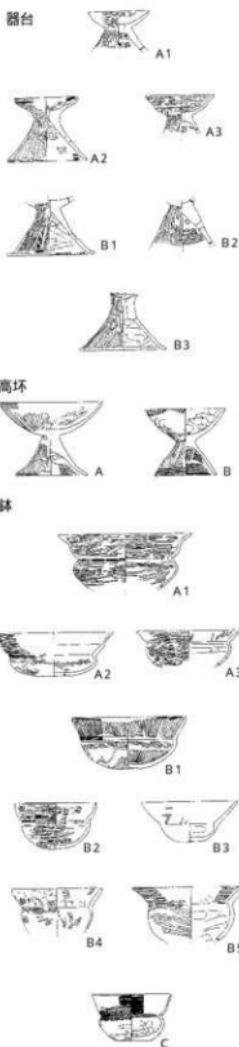
#### 鉢

口縁部に最大径を持つものを鉢とした。

鉢 A は、S 字状の口縁部を持つもので、頸部が強くくびれ、口縁部下半が内弯氣味に立ち上がって上半で外反し、S 字状を呈するもの (A 1) と、口縁部下半がやや厚みを持って外傾し、段をもって口縁部上半に至るもの (A 2)。口縁部は小さくなり、下半部がやや肥厚して内面の段は消滅しているもの (A 3) がある。A 2 は A 1 の退化形、A 3 はさらに退化したものと考えられる。

鉢 B は、丸底で体部と口縁部の境で屈曲し、内面に稜を形成するもので、口縁部が外傾し、体部が浅めのもの (B 1) と口縁部が内弯氣味に立ち上がるもの (B 2) と口縁部が内弯氣味に大きく開くもの (B 3)。丸い体部を持ち、口縁部が外傾するもの (B 4) と口縁部が外反するもの (B 5) がある。

鉢 C は、鉢 B と同じく、体部と口縁部の境で屈曲し、内面に稜を形成するが、平底のもの。



第39図 土師器分類図(1)

鉢Dは、丸く小さな体部を持つ小型品。内弯して立ち上がる体部がそのまま口縁端部に至るもの（D1）と内弯して頸部にいたり、口縁部は外傾するもの（D2）、内弯して頸部にいたり、口縁部は内弯気味に長くのびるもの（D3）がある。

鉢Eは、丸底で体部上端がいったん内弯し、そのまま外反して短い口縁部を形成するもの。

鉢Fは、平底で体部と口縁部の境で屈曲し、内面に稜を形成するもので、頸部で僅かにくびれるが、ほぼ底部から口縁端部まで直線的に開くもの（F1）と口縁部を折り返すもの（F2）がある。

鉢Gは、体部と口縁部の境にくびれを持たないもの。体部の上端で口縁部をつまみ出し、外反させるもの（G1）と口縁部が緩く外反し、沈線により体部と口頸部の境とするもの（G2）がある。

鉢Hは、底部から屈曲を持たずに口縁端部に至る小型品を一括した。

鉢Iは、手捏土器を一括した。

鉢Jは、大型で肩が張り、やや外反する口縁部を持つもの。底部は不明である。

鉢Kは、大型で体部と口縁部の境が屈曲し、内面に稜を持つもの。底部に焼成後穿孔が認められる。

鉢Lは、口縁部中程で屈曲し、軽い稜を持つ。頸部以下は不明である。

甌

形態分類上は鉢に属するが、逆切断円錐形の体部を持ち、焼成前穿孔のものを甌として区別した。

甌Aは、口縁部を折り返し、底部に単孔を有するもの。

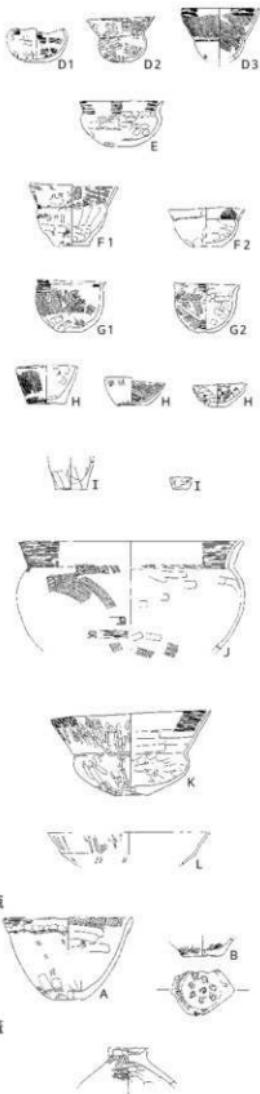
甌Bは、体部形状は不明であるが、底部に8孔を有するもの。

蓋

輪状のつまみを有する。1点のみの出土である。

壺

壺Aは、二段に伸びる口縁部を持つもの。体部は不明である。薄手で、口縁部下半がほぼ水平に開き、上半部が外反するもの（A1）と薄手で太い頸部を持つもの（A2）、厚手



第40図 土師器分類図(2)

で口縁部下半が外傾し、口縁部上半でさらに外傾して端部で外反、口縁部上半下部を垂下させるもの（A3）がある。

壺Bは、口縁部が外傾し、口縁部下端を折り返すもの。頸部と口縁部の境界内面に屈曲部を持つもの（B1）と口縁部内面の屈曲が無く、僅かに内弯するもの（B2）とがある。

壺Cは、頸部から口縁部が一体となって外反し、頸部と口縁部の境界外面に稜を持つもの。稜が鋭く尖るもの（C1）と稜が弱く、口縁部外面をハケメのまま残すもの（C2）とがある。

壺Dは、頸部が直立し、口縁部で外反する。頸部と口縁部の境界外面に稜を持つ。図上復元したものであるが、肩が張る倒卵形の体部を持ち、底部は小さい。

壺Eは、頸部が直立し、頸部と体部の境に凸帯を巡らすものの。口縁部や体部は不明である。

壺Fは、単純に外反する口縁部を持ち、体部中程からやや下に最大径を持つもの。体部外面に密なミガキを施す。

壺Gは、口頸部が外傾するもの。肩部以下は不明。口縁部が外傾し、端部でやや内弯気味に収まるもの（G1）と口縁部を折り返すもの（G2）。口縁部が強く外傾し、口縁端部が丸く収まるもの（G3）。口縁部が直線的に外傾するもの（G4）とがある。

壺Hは、口縁端部に面を作り出すもの。口縁部が外傾し、端部で外反するもの（H1）と口縁部が外反するもの（H2）がある。

壺Iは、平底で球状の体部を持つもの。口縁部は不明。

壺Jは、小型壺。ややつぶれた体部を持ち、口頸部が内弯気味に立ち上がるるもの（J1）と丸い体部を持ち、頸部径が大きく、口頸部は直線的に外傾するもの（J2）がある。

#### 甕

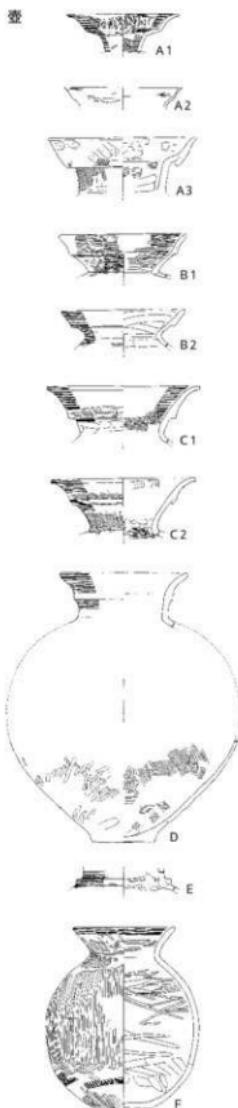
甕Aは、口縁部に段を有するもの。台は伴わないが、いわゆる「S字甕」の範疇で捉えられるもの。

甕Bは、口縁端部に面を作り出すもの。いわゆる「能登型甕」の範疇で捉えられるもの。

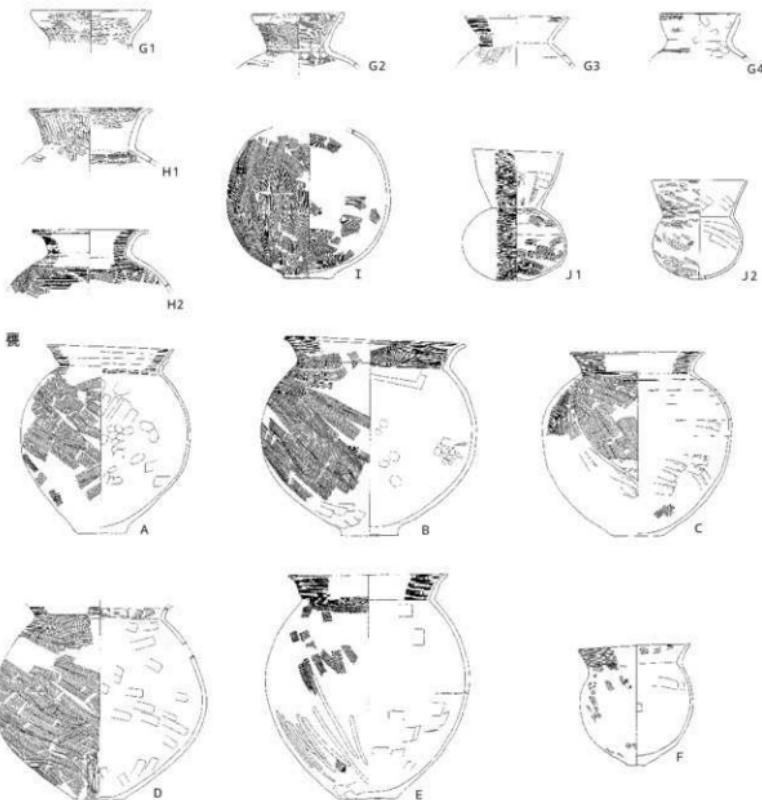
甕Cは、比較的肩が張り、体部上半に最大径を持つもの。

甕Dは、肩部中程に最大径を持つもの。

甕Eは、肩の張りが小さく、なで肩を呈する一群。さらに



第41図 土師器分類図(3)



第42図 土師器分類図(4)

細別は可能であるが、ここでは一括した。

甕Fは、小型甕の一群を一括した。

以上、調査で得られた土器の類別を行ったが、北陸地方や東海地方の影響が窺われる土器が散見する。これらの細別は今後の課題である。類型別の出土状況を別に示したが、全体的に見るとST3、ST5、ST7、ST17等が相互に類似性を有しているように見える。また鉢A類については、A1→A2→A3という退化の流れが考えられることから、これらの間に微少な時期差は考えられよう。ここでは、詳細な年代に言及せず、およそ4世紀初頭として括っておく。なおST5竪穴住居跡の一括遺物について、田嶋明人氏(石川県教育委員会)より漆町編年の第8群土器との類似性が認められる、とのご教示を頂いていることを付言しておく。

表8 類型別土師器出土一覽

◎ : 複数出土

	ST 3	ST 4	ST 5	ST 6	ST 7	ST 8	ST 9	ST 11	ST 12	ST 13	ST 14	ST 15	ST 17	ST 19	SK 71	SK 72	狀状遺	S X 10	S X 18	包含
器首	A 1				○														○	
	A 2																		○	
	A 3																		○	
	B 1					○					●		○					○	●	
	B 2																		○	
	B 3																		○	
高环	A																		○	
	B	○																		
鉢	A 1																		○	
	A 2																		○	
	A 3													○						
	B 1		○																○	
	B 2																		○	
	B 3					○													○	
	B 4	○	○																○	
	B 5																		○	
	C	○	○																	
	D 1																		○	
	D 2	○				○							○						○	
	D 3												○						○	
	E	○																	○	
	F 1																		○	
	F 2												○							
	G 1																		○	
	G 2		○																	
	H												○						●	
	I											●								
	J																			
	K	●																		
	L					○														
壺	A																		○	
	B					○														
	A 1												○							
	A 2												○							
	A 3			○																
	B 1												○							
	B 2																○			
	C 1												○							
	C 2					○														
	D												○							
	E																		○	
	F	●																		
	G 1												○							
	G 2																○			
罐	G 3			○																
	G 4	○	○	○	○	○	○						○							
	H 1												○							
	H 2																		○	
	I																			
	J 1	○	○	○	○													○	○	
	J 2												○							
	A					○							○					○	●	
	B					●												○	○	
	C						○						○							
匣	D					○														
	E	○	○			○	●						●	●						
	F	○	○																	
	蓋					○														

## 報告書抄録

ふりがな	しょうぶえいせきだい2じはくつちょうさほうこくしょ							
書名	菖蒲江1遺跡第2次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第105集							
編著者名	尾形與典 長瀬えみ子							
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301							
発行月日	西暦2002年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
菖蒲江1	山形県天童市 大字高揖字高田、 菖蒲江	市町村 210	遺跡番号 平成10年度登録	38度 19分 43秒	140度 20分 12秒	20010709 ~ 20011109	3,480	緊急地方道整備事業主要地方道天童寒河江線道路改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
菖蒲江1	集落跡	古墳時代 前期	竪穴住居跡 土坑 畝状遺構	14棟 2基 6群	弥生土器 古式土師器 (高坏等) 石器(石鎚) 石製品(砾石)	6軒の焼失家屋より塩釜式土器が多数出土		

図 版





遺跡遠景（西から）



重機稼働状況



調査区環境整備



面整理作業



遺構精査作業

図版 2



記録作業



遺構精査作業



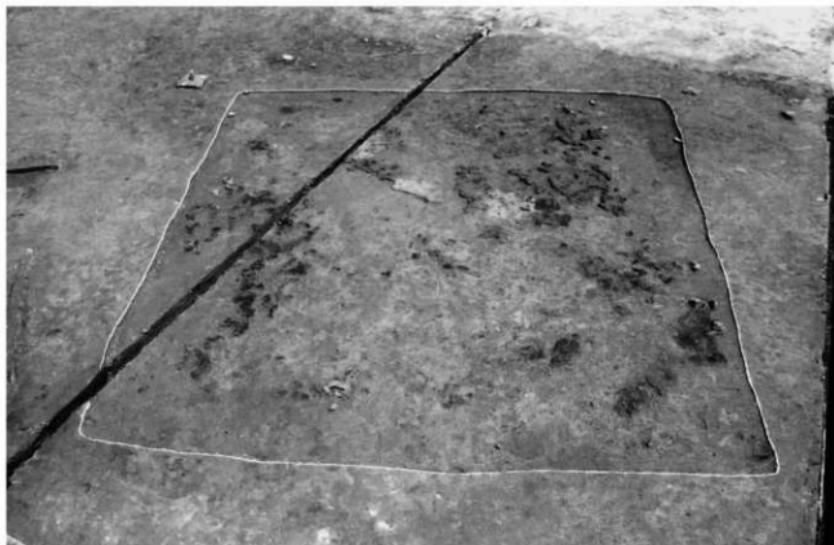
記録作業



調査説明会



調査説明会



S T 3 炭化材、遺物出土状況（南から）



S T 4 炭化材、遺物出土状況（南から）

図版 4



S T 3 遺物 (No. 9) 出土状況 (北から)



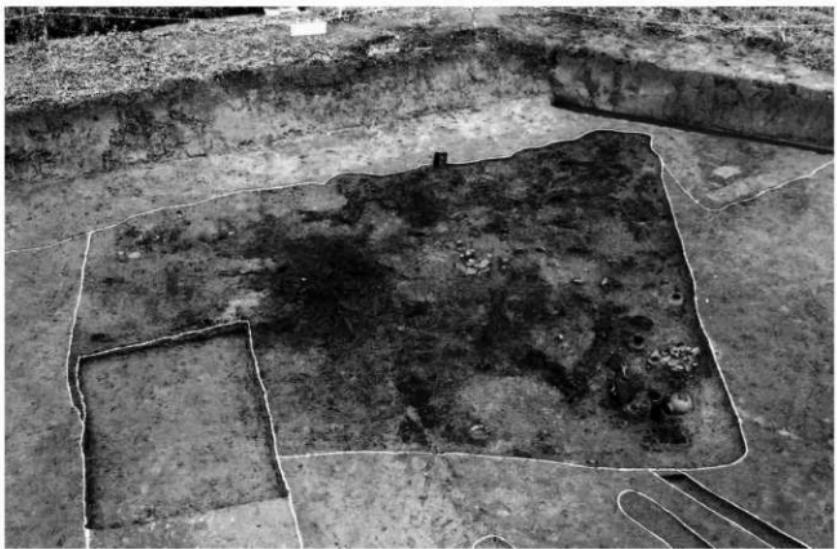
S T 3 ワラ状炭化物、遺物 (No. 2, No. 10) 出土状況(東から)



S T 3 遺物 (No. 1, No. 8) 出土状況 (北西から)



S T 4 遺物 (No. 13, No. 14) 出土状況 (北から)



S T 5 炭化材、遺物出土状況 (南から)



S T 5 炭化材、遺物出土状況（南東から）



S T 5 炭化材出土状況（南から）

図版 6



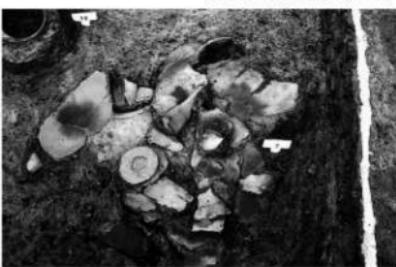
S T 5 貯蔵穴板材出土状況（北西から）



同左半截状況（西から）



同上 板材下の遺物(No. 29)出土状況(北西から)



S T 5 遺物(No. 23)出土状況(南から)



S T 5 完掘状況(南から)



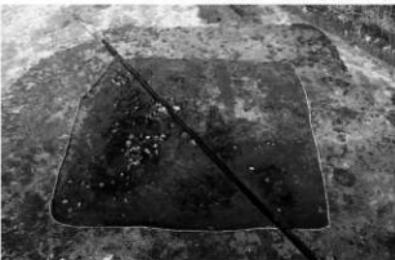
S T 6 完掘状況（南から）



S T 7 遺物出土状況（南から）



S T 8 遺物出土状況（南から）



S T 13 遺物出土状況（南から）



S T 15 遺物出土状況（南から）



S T 14 炭、遺物出土状況（南から）



S T 15 遺物（No. 110）出土状況（南から）



S K 72 遺物出土状況（西から）

図版 8



S T17 完掘状況(東から)



S T19 炭化材、遺物出土状況(東から)

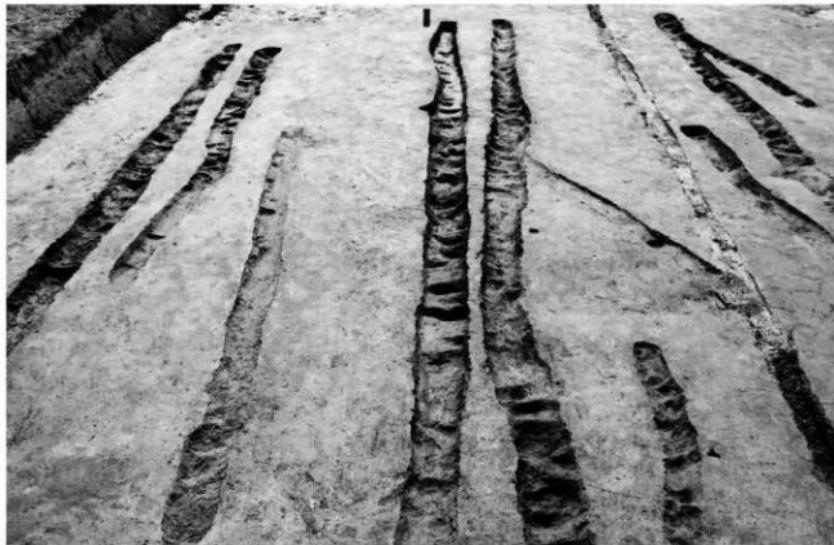


S X 18 遺物出土状況（東から）



B 区南半部 泥炭区域検出状況（北から）

図版10



B区 欽状遺構完掘状況（北から）

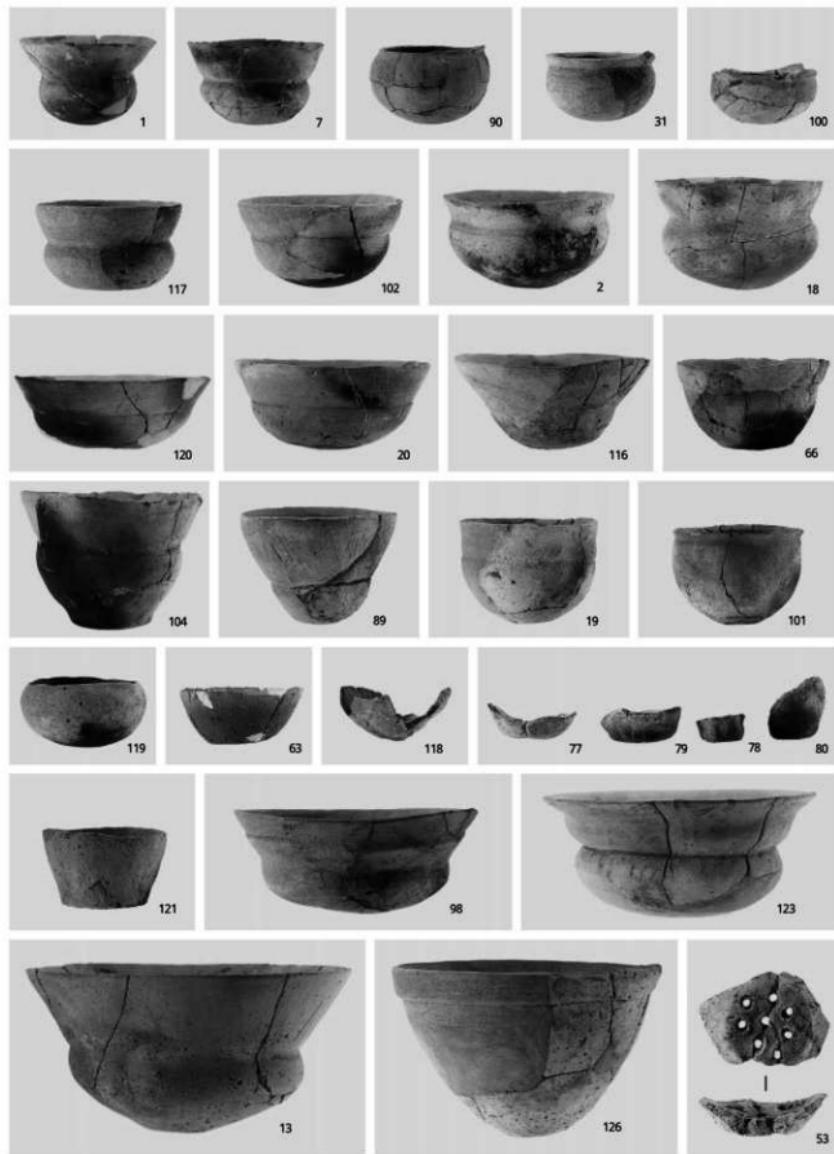


A・B区 中央部完掘状況（西から）



調査区空中写真

图版12

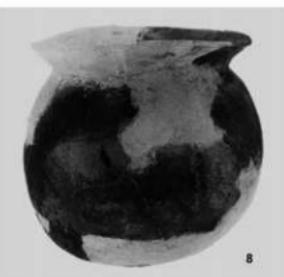


図版13

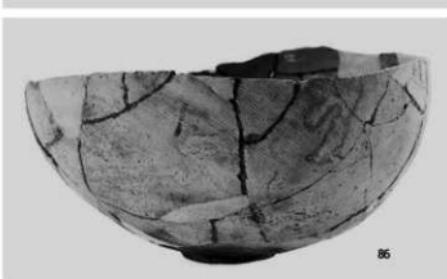


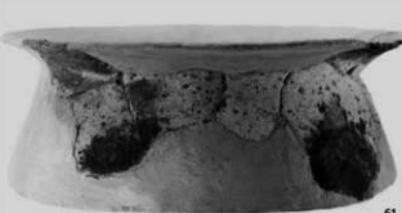
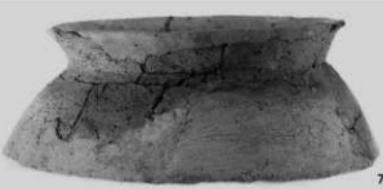
图版14



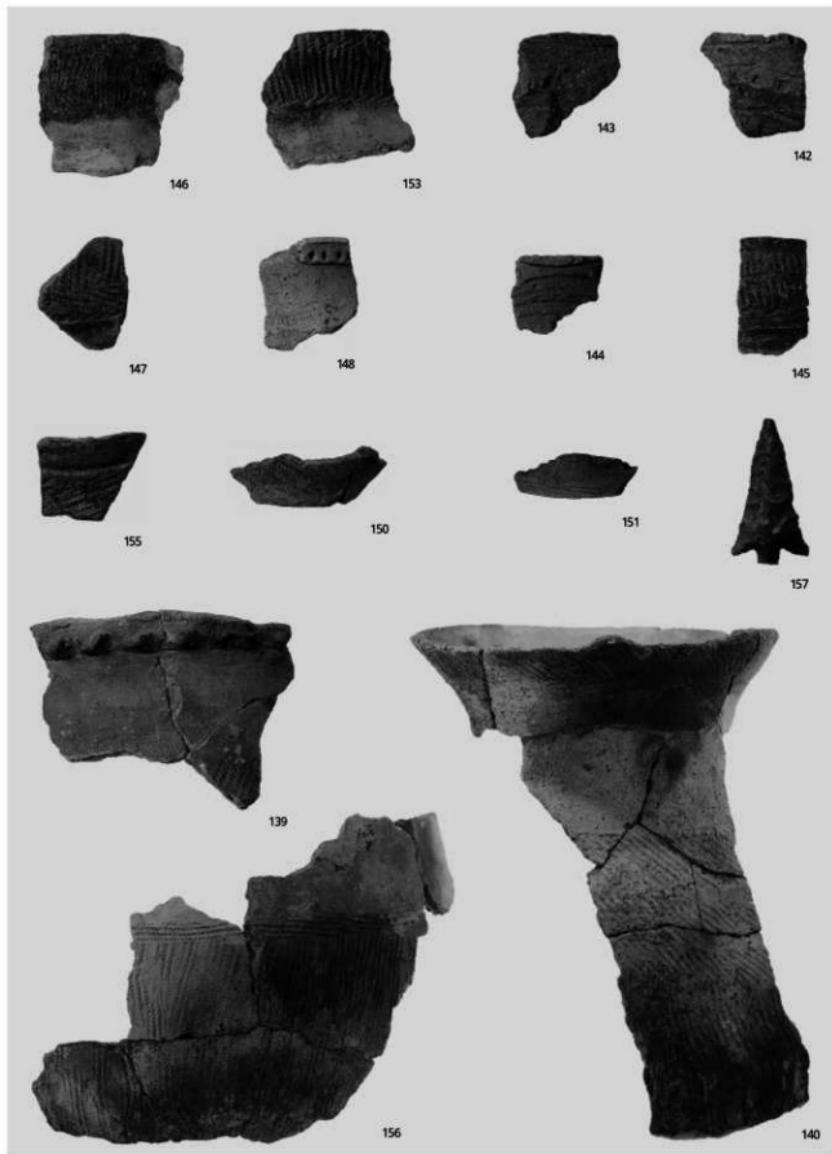


图版16





图版18



---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第105集

しょう ふくわんじ 1 遺 跡

第2次発掘調査報告書

2002年3月31日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター

〒999- 3161

山形県上山市弁天二丁目15番1号

☎023- 672- 5301

印刷 大場印刷株式会社

---

